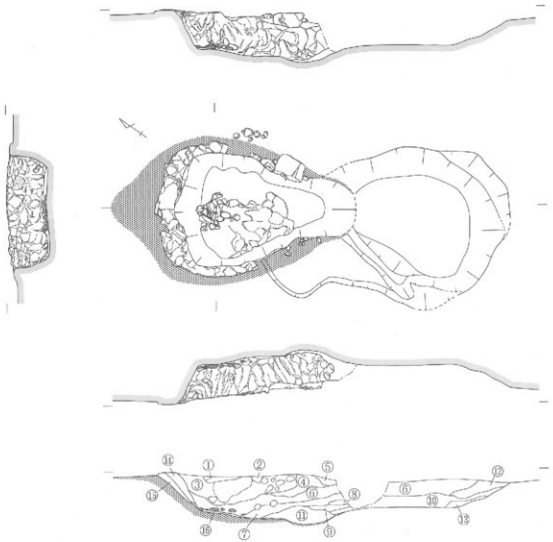


図136　土器焼成窯 実測図

り下げて、その後焼成部から焚口の境付近までの壁面に粘土を貼りつけて（⑭・⑮層）壁面の角度を急にする。その際には粘土表面を縦方向にヘラ状工具でナデており、壁面にはその痕跡が明瞭に認められる。焼成部壁面の現況の高さは0.4mだが、焼成部の埋土中からは炉壁片がかなり出土していることから、もう少し高さはあったといえる。また出土した炉壁には幅３cmほどの板の圧痕が連続しているものがあり、焼成部上半の炉壁はナデるだけでなく、連続的に押さえて表面を調整した部分もあるようである。ただ炉壁は全て直線的な個体であることから、焼成部を覆うようなドーム構造になっていなかったようで、そういった意味からは土師器を焼成していた窯である可能性が高い。壁面の焼成状況は下半にいくほど甘く、上半や焼成部内の落ち込んだ炉壁ほど須恵質に近く、硬質に焼けてい

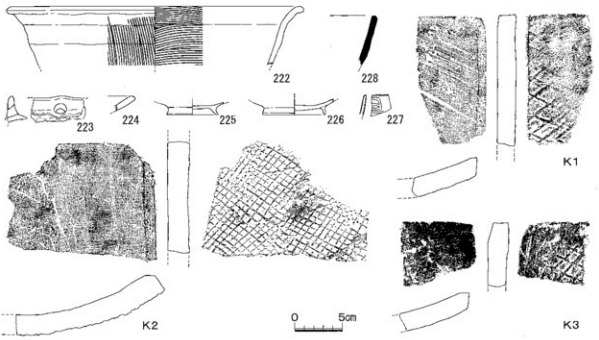


図137　土器焼成窯 出土遺物（１）

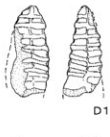


図138　土器焼成窯 出土遺物（２）

る。焼成部から焚口部との境付近までの壁面ができた後に焼成部の床面には薄く粘土を貼り（⑯層）、その上に礫で分焔柱をつくる。焚口背後の作業場については、掘り下げた後はとくに手を加えていないが、両側の段は出入り口を意識してのことかもしれない。

出土遺物の大半は炉壁片で、土師質土器鍋（222～224）、土師質土器椀（225・226）、須恵質土器鉢（228）、青磁（227）、平瓦（Ｋ１～Ｋ３）、泥塔（Ｄ１）も出土した。平瓦については、窯を構築する際にもしくは焼台などに用いられたと思われる。出土した土器は、破片ばかりである。それらがこの窯で焼成されたものかどうかは不明であるが、14～15世紀の青磁碗（227）が出土していることから、少なくとも土師質土器鍋（222）や土師質土器椀（225・226）とは年代的な差があることから、この窯で焼かれたものとはいえない。

溝３（図139）

Ｅ区中央で検出された溝で、長さ約6.0m、幅0.9mである。遺構検出面は5.3m付近で、深さは検出面から５cmほどである。土器焼成窯に伴う可能性も考えたが、深さも浅く、遺物も出土しなかったため明確にできなかった。土器焼成窯とは軸方向も異なっており、両者の関係を示す根拠はない。溝５や溝６の低位部の溝と方向的には直交しており、耕作に伴う溝である可能性が高いように思われる。

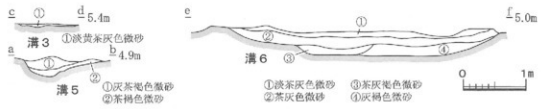


図139　E区中世遺構面溝 断面図

溝5（図139）

E区西側で検出した溝で、調査区中央やや北寄りで完結している。幅0.8～1.2mで、かなり不整形な平面形を呈している。遺構検出面は4.9m付近で断面形は台形を呈するが、東側の方がやや傾斜が緩くなっている。微高地高位部分がある東側からの水を受けていた結果であろう。

遺物は出土しなかったが中世後半の水田層よりも下位で検出されたことから、中世の時期と考えられる。

溝6（図139）

E区西側で検出された溝で平面的には幅が4.2mもあるが、断面形は傾斜の緩やかなU字形である。遺構検出面は4.8m付近で、最深部の深さは0.35mと深さも幅と比較すると浅い。埋土は4層であるが基本的には上・中・下の3層で、底に埋没していったと考えられる。

遺物は極めて少なく、土師質土器の小片が若干出土したのみである。

水田層出土遺物（図140、141、142、143）

E区西側の低位部には水田層が認められ、その層中や上面の近世水田層から中世の遺物が出土した。

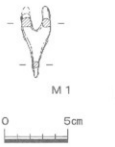


図141　水田層 出土遺物(2)

図142　水田層 出土遺物（3）

図143　水田層 出土遺物（4）

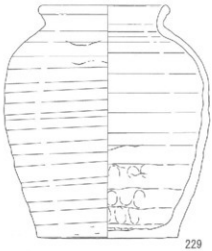


図140　水田層 出土遺物（1）

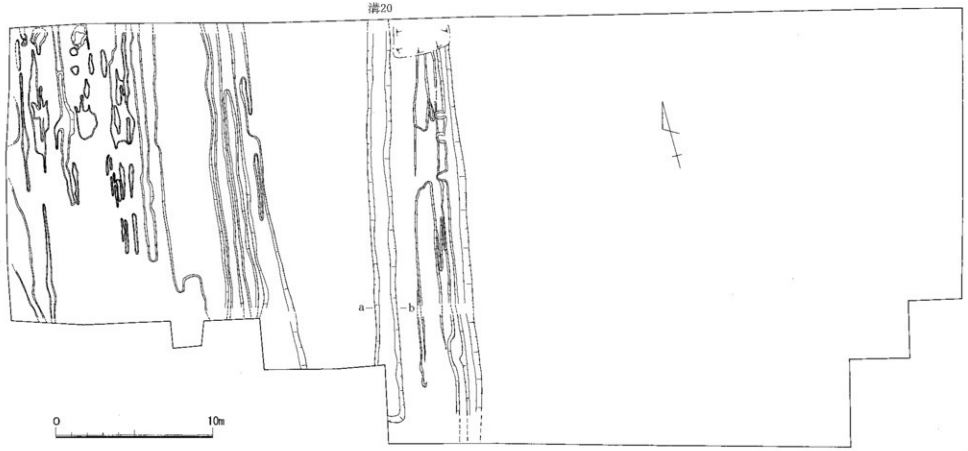


図144　E区近世 遺構面

備前焼壺（229）は包含層を切り崩した近世水田層から出土したものでほぼ完形である。内部には火葬骨が入っていたことから骨蔵器であったといえる。付近に中世墓が形成されていたことを示唆している。備前焼壺（229）は間壁編年Ⅴ期(11)、乗岡編年中世６期(12)、重根編年Ⅴ期(13)に相当する。鉄鏃（Ｍ１）は中世水田層から出土した。銅銭（Ｍ２）、銅鏡（Ｍ３）は近世水田層から出土した。銅銭は表面が劣化しており、「宝」の字だけが判読できる。銅鏡（Ｍ３）は和鏡で、径9.1cm、周縁は垂直に立ち上がり、周縁の幅は２mmである。鏡背には界圏を挟んで幅線文帯が２重にめぐる幅広い外区と、内区には２対の双鳥と檜垣、松葉、菊花を配し、中央の鈕座は亀形鈕である。いわゆる擬漢鏡で、15世紀前後の時期といえる(10)。

Ⅳ　近世（図144）

Ｅ区中央西側の部分は中世後半に水田化され、近世になっても徐々に微高地高位部を削って水田化している。18世紀になるとそれまで水田化されていた上面に、微高地高位部の包含層をそのまま大きく切り崩して地上げし、大規模な水田開発をおこなっている。低位部が水田化されて以降の水田開発の画期といえる。検出された遺構の大半は、検出面からの埋土が３～４cmほどの浅い素掘り溝である。

溝20（図144、145）

Ｅ区中央西よりで検出された溝で、遺構検出面は5.1m付近となる。検出面での幅は1.4m、深さは検出面から0.45mである。断面Ｕ字形で、埋土は５層確認できた。調査区南端で完結している可能性が高く、埋土もブロック的な堆積であることから、水路というよりも地下げのために掘り下げられて埋められた溝である可能性が高い。遺物は極めて小片の陶磁器片が１点出土したのみである。

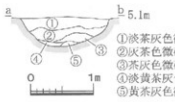


図145　溝20 断面図

水田層（図146）

水田層中には中世以前の遺物は多く含まれているものの、近世の遺物は極めて稀である。とくに微高地高位部を切り崩した土層（図７－㉘層）は包含層そのものであり、古代から中世の遺物が多量に含まれていた。そのうち最も新しいものは、近世陶磁器で図化できたものは肥前磁器の染付皿（230）で、18世紀前半のものである。この水田開発の上限を示している。

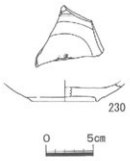


図146　近世水田層 出土遺物

注

（1）高畑知功ほか「津寺遺跡」５『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127　1998年

（2）草原孝典『吉野口遺跡』岡山市教育委員会　1997年

（3）清水真一「校倉」『日本の美術』4　至文堂　2001年
（4）出宮徳尚ほか『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市遺跡発掘調査団　1975年
（5）林　博通『大津京跡の研究』思文閣出版　2001年
（6）宇野桂太「備前熊山南麓の瓦」『吉備考古』第八十六号　1953年
（7）田代健一「備前市内採集の遺物について」『古代吉備』第10集　1988年
（8）注2
（9）間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート」（1）～（4）『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18
1966、1966、1968、1984年
（10）尾上　実「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古希記念古文化論叢』1983年
（11）注9
（12）乗岡　実「中世の備前焼甕（壺）の編年案・紀年名資料に見る大甕（壺）の変遷」『第2回中近世備前焼研究会資料』2000年
（13）重根弘和「まとめ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』167　2002年
（14）中野正樹「和鏡」『日本の美術』10・11　至文堂　1969年
久保智康「中世・近世の鏡」『日本の美術』3　至文堂　1999年

Ⅴ　出土土器観察表

器形	土器番号	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・調整手法の特徴	胎土	色調	遺構
カマド	1	—	—	—	外面タテハケ、内面上半ナメハケ、下半ヨコハケ後、タテナデ。	含長石・石英	茶灰色	P20
須恵器杯	2	15.4	8.0	7.8	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	淡灰色	P20
須恵器杯	3	—	8.8	—	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	淡灰色	P20
須恵器杯	4	—	8.0	—	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	淡灰白色	P20
須恵器杯	5	14.0	10.0	4.0	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後押圧。	含長石・石英	淡灰白色	P20
土師器皿	6	16.0	13.2	2.0	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後押圧。	含長石・石英	橙褐色	P20
黒色土器椀	7	12.4	6.4	4.6	内面黒色で、内外面ヘラミガキ。	含長石・石英	淡灰白色	P114
土師器椀	8	14.4	7.4	4.0	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	淡橙灰色	P28
土師器椀	9	10.8	6.0	2.2	内面ナデ、外面ユビナデ。	含長石・石英	灰白色	竈埋
土師器杯	10	15.6	9.0	3.8	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	橙灰色	P31
黒色土器椀	11	16.0	6.8	5.7	内面ヨコヘラミガキ、外面下半ケズリ。	含長石・石英	淡黄橙色	溝15
黒色土器椀	12	—	6.9	—	内面黒色タタキ目。	含長石・石英	乳白色	水田層
土師器椀	13	14	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡橙灰色	水田層
土師器皿	14	8.8	6.4	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板ヨ。	含長石・石英	橙茶色	水田層
緑釉陶器底部	15	—	—	—	京都産。	—	—	溝15
須恵器壺	16	—	4.5	—	内外面ヨコナデ、底部外面糸切り。	含長石・石英	灰色	溝15
土師器脚	17	—	—	—	内外面ナデ。	含長石・石英	淡赤橙色	水田層
土師器椀	18	—	11.4	—	内外面ナデ。	含長石・石英	淡黄橙灰色	水田層
土師器香炉蓋	19	18.7	8.9	—	内外面ヘラミガキ、偏面に長方形ハート形、天井部に円形の透かしがある。内面スス付着。	含長石・石英・赤色粒	赤橙色	溝13
土師器高杯	20	25.1	16.5	14.4	外面ヘラミガキ、脚端部ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	赤橙色	溝13
土師器高杯	21	25.5	—	—	内面ヨコナデ、外面ナデ。	含長石・石英	淡灰黄橙色	溝13
須恵器蓋	22	11.9	—	2.6	内面ヨコナデ、外面ケズリ後ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰褐色	溝13
須恵器杯	23	12.6	8.5	3.15	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ユビナデ。	含長石・石英	淡灰褐色	溝13
須恵器杯	24	12.6	9.5	4.25	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰色	溝13
須恵器杯	25	15.6	10.3	5.65	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝13
須恵器皿	26	15.4	13.6	2.7	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ後ナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝13
埴塊	27	—	—	—	ナデ。	含長石・石英	淡灰褐色	溝13

須恵器鉢	28	25.8	—	14.6	内外面ヨコナデ、底部内面ナデ。	含長石・石英	淡青灰色	溝13
須恵器杯	29	8.0	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	建物1
坩堝	30	12.5	—	7.15	内外面ナデ。	含長石・石英	灰黄色	P265
坩堝	31	10.0	—	5.5	内外面ナデ。	含長石・石英	黄橙色	P265
坩堝	32	10.2	—	5.4	内外面ナデ。	含長石・石英	灰白色	P265
須恵器杯	33	—	—	9.4	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰色	P265
緑釉陶器碗	34	18.4	—	—	京都産。	—	—	P265
土師器皿	35	10.0	5.6	1.6	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	淡橙灰色	井戸1
土師器椀	36	—	—	—	黒色土器の可能性あり。	含長石・石英	淡赤橙色	井戸1
須恵器蓋	37	12.7	—	2.6	外面ヘラケズリ後、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰色	溝11
須恵器蓋	38	15.5	—	—	外面ヘラケズリ後、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝13
須恵器杯身	39	14.8	9.45	4.85	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ。	含長石・石英	灰白色	溝13
須恵器杯	40	11.2	8.8	3.2	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り後板ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝11
須恵器杯	41	11.5	9.2	3.1	内外面ヨコナデ、底部へラ切り後板ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝11
須恵器杯	42	11.3	4.5	3.35	内外面ヨコナデ、底部へラ切り後板ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝13
須恵器杯	43	9.5	8.0	3.95	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り。	含長石・石英	灰白色	溝11
須恵器杯	44	10.7	8.1	3.1	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝13
須恵器杯	45	10.5	8.2	2.9	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝13
須恵器杯	46	11.1	8.7	3.55	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝13
須恵器杯	47	11.4	8.7	3.2	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝11
須恵器杯	48	10.2	7.7	2.95	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝11
須恵器杯	49	10.3	7.0	3.65	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後板ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝11
須恵器杯	50	10.4	8.2	3.3	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝13
須恵器杯	51	10.5	7.6	3.5	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝11
須恵器杯	52	11.0	8.0	3.1	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝11
須恵器杯	53	10.7	8.0	3.1	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後板目。	含長石・石英	灰白色	溝13
須恵器杯	54	10.6	9.9	3.15	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝13
須恵器杯	55	10.8	7.6	3.0	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝11
須恵器杯	56	10.3	7.9	2.8	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝11
須恵器杯	57	—	7.0	—	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り。	含長石・石英	灰白色	溝11
須恵器杯	58	10.8	9.1	3.05	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝13
須恵器杯	59	10.1	7.8	3.2	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝13
須恵器杯	60	—	7.2	—	内外面ヨコナデ、底部外面へナナデ、内面にヘラ記号あり。	含長石・石英	灰色	溝13
須恵器杯	61	—	7.8	—	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰色	溝11
土師器椀	62	7.95	4.2	3.1	内外面ナデ。	含長石・石英	黄橙色	溝11
土師器椀	63	12.7	5.4	3.3	内外面ナデ。	含長石・石英・角閃石	橙灰色	溝11
土師器椀	64	11.4	4.35	3.05	内面ハケ、外面ナデ、外面下半ユビ押さえ。	含長石・石英	黄橙色	溝13
土師器皿	65	10.4	8.2	3.3	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝13
土師器椀	66	12.2	8.55	3.15	内外面ナデ。	含長石・石英	橙色	溝13
土師器椀	67	16.0	14.0	3.0	内外面ヨコナデ、底部外面へラケズリ。	含長石・石英	黄橙色	溝20
土師器椀	68	10.8	6.6	2.8	内面ハケ、外面上半ヨコナデ、下半ユビ押さえ。	含長石・石英	褐灰色	溝13
土師器皿	69	8.95	6.25	1.9	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ、赤色顔料塗布。	含長石・石英	橙色	溝13
土師器椀	70	10.6	4.0	2.95	内面ハケ、外面上半ヨコナデ、外面下半ユビ押さえ。	含長石・石英	灰白色	溝11
須恵器杯	71	10.1	7.9	2.1	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝11
土師器皿	72	10.7	9.5	3.1	内面ハケ、外面下半へラケズリ後ナデ。赤色顔料塗布。	含長石・石英	橙色	溝13
土師器皿	73	11.8	—	—	内外面ヨコナデ、外面下半ケズリ。	含長石・石英	橙色	溝13
土師器甕	74	22.7	—	—	外面タテハケ、口縁部内面ヨコハケ後ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色	溝13
土師器甕	75	12.3	—	—	外面タテハケ、内面ヨコハケ、胴部ケズリ後ナデ。	含長石・石英	黄橙色	溝15
土師器甕	76	14.3	—	—	外面タテハケ、内面ヨコハケ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙色	溝11
須恵器皿	77	19.8	2.0	16.9	内外面ヨコナデ、底部外面へラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝11
須恵器皿	78	26.4	22.4	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面へラケズリ。	含長石・石英	灰色	溝11
須恵器皿	79	26.8	21.3	2.8	内外面ヨコナデ。底部外面へラケズリ。	含長石・石英	灰色	溝11

須恵器杯	80	10.8	9.1	3.05	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	灰白色	溝11
須恵器蓋	81	11.7	11.6	(27.35)	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ。	含長石・石英	灰白色	溝11
須恵器蓋	82	—	15.9	—	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ。	含長石・石英	灰白色	溝11
須恵器鉢	83	29.2	27.5	21.3	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝17
須恵器壺	84	13.9	—	28.1	外面平行タタキ後カキメ、内面同心円タタキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰色	溝11
須恵器甕	85	26.0	—	—	外面平行タタキ後カキメ、内面同心円タタキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰色	溝11
二彩陶器	86	—	—	—	多口瓶の口頸部片。	—	—	溝13
三彩陶器	87	6.9	—	—	多口瓶の口縁部片。	—	—	溝13
二彩陶器	88	—	—	—	瓶の胴部片か？	—	—	溝11
二彩陶器	89	—	—	—	瓶の胴部片か？	—	—	溝13
三彩陶器	90	—	—	—	多口瓶の口縁部片。	—	—	溝11
三彩陶器	91	—	—	—	瓶の胴部片か？	—	—	溝11
二彩陶器	92	—	—	—	瓶の胴部片か？	—	—	溝11
三彩陶器	93	—	—	—	瓶の胴部片か？	—	—	溝13
三彩陶器	94	—	9.8	—	瓶の脚端部片、DとE区出土片が接合。	—	—	溝13
土師器杯	95	16.0	8.2	4.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後押圧、丹塗り。	含長石・石英	橙灰色	溝12
土師器杯	96	17.6	9.2	6.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後押圧、丹塗り。	含長石・石英	橙灰色	溝12
土師器杯	97	—	8.6	—	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後押圧、丹塗り。	含長石・石英	橙灰色	溝14
土師器杯	98	12.6	7.5	3.1	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	橙褐色	溝12
土師器杯	99	12.4	8.4	3.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ、丹塗り。	含長石・石英	橙褐色	溝14
土師器杯	100	13.0	7.0	4.0	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ、丹塗り。	含長石・石英	橙褐色	溝16下層
土師器杯	101	12.2	7.0	3.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	橙褐色	溝14
土師器杯	102	12.7	8.0	3.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ、丹塗り。	含長石・石英	橙褐色	溝14
土師器杯	103	12.0	6.1	3.1	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	橙褐色	溝14
土師器杯	104	12.1	6.9	2.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ、丹塗り。	含長石・石英	橙褐色	溝19下層
土師器皿	105	14.0	11.2	1.7	内外面ヨコナデ、底部外面押圧。	含長石・石英	橙褐色	溝19下層
土師器杯	106	12.1	8.0	2.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ、丹塗り。	含長石・石英	橙灰色	溝14
土師器杯	107	12.1	8.0	2.7	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	橙灰色	溝14
土師器杯	108	12.4	9.0	3.7	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後押圧。	含長石・石英	淡灰褐色	溝19下層
土師器椀	109	12.8	7.0	3.4	内外面ヨコナデ、丹塗り。	含長石・石英	淡灰褐色	溝12
緑釉陶器椀	110	—	—	—	京都産。	—	—	溝16下層
土師器杯	111	12.5	7.0	2.8	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後押圧、丹塗り。	含長石・石英	淡褐色	溝14上面
土師器杯	112	11.8	7.4	3.1	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後押圧、丹塗り。	含長石・石英	橙灰色	溝14上面
土師器杯	113	12.5	8.4	2.7	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後押圧、丹塗り。	含長石・石英	橙灰色	溝14上面
土師器杯	114	13.7	8.0	3.7	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後押圧。	含長石・石英	灰褐色	溝19上面
土師器杯	115	12.8	8.0	3.0	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後押圧、丹塗り。	含長石・石英	灰褐色	溝19上面
土師器杯	116	16.0	10.0	5.1	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後押圧、丹塗り。	含長石・石英	灰橙色	溝19上面
土師器杯	117	13.2	8.0	2.6	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後押圧、焼成前穿孔あり。	含長石・石英	淡橙色	溝19上面
土師器杯	118	12.0	7.3	3.7	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	灰褐色	溝26下層
備前焼鉢	119	16.2	6.2	6.4	内外面ヨコナデ、底部外面糸切り、口縁端部に重ね焼き痕あり。	含長石・石英	灰褐色	溝26上層
土師器皿	120	11.0	5.0	3.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	橙褐色	溝26上層
土師器皿	121	9.9	4.1	2.0	内外面ヨコナデ、底部外面ナデ。	含長石・石英	橙褐色	溝26上層
土師器皿	122	10.1	7.4	1.7	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	橙褐色	溝19上面
土師器杯	123	14.4	9.0	3.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	橙褐色	溝19上面
土師器杯	124	14.6	8.0	3.0	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	橙褐色	溝19上面
土師器皿	125	10.4	7.4	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	橙灰色	溝26上面
土師器皿	126	9.6	7.0	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	橙灰色	溝26上面
土師器杯	127	13.0	9.0	3.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後押圧、丹塗り。	含長石・石英	橙灰色	包含層
土師器杯	128	11.2	9.0	—	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後押圧。	含長石・石英	橙灰色	包含層
土師器皿	129	20.4	16.0	1.6	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ、丹塗り。	含長石・石英	橙灰色	包含層
須恵器杯	130	—	9.6	—	底部外面ヘラケズリ。転用硯。	含長石・石英	灰褐色	包含層
須恵器杯	131	—	11.2	—	底部外面ヘラケズリ。転用硯。	含長石・石英	灰色	包含層

須恵器皿	132	—	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰色	包含層
須恵器壺	133	—	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰色	包含層
灰釉陶器皿	134	—	7.0	—	薄く釉がかかる。	—	—	包含層
白磁壺	135	9.0	—	—	灰色を帯びた白色の釉を施釉する。	—	—	包含層
青磁碗	136	—	6.0	—	越州窯産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	137	13.0	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	138	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	139	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	140	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	141	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	142	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	143	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	144	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	145	—	—	—	不明。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	146	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	147	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	148	—	—	—	尾張産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	149	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	150	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	151	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	152	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	153	—	—	—	不明。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	154	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	155	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	156	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	157	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	158	—	—	—	不明。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	159	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	160	—	6.0	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	161	—	—	—	京都産。二次的な被熱を受けている。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	162	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	163	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	164	—	—	—	尾張産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	165	—	—	—	尾張産。	—	—	包含層
緑釉陶器耳皿	166	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器耳皿	167	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
緑釉陶器碗	168	—	—	—	京都産。	—	—	包含層
土師器杯	169	—	—	—	内外面ヨコナデ、丹塗り。外面に「寺寺」の墨書あり。	含長石・石英	橙褐色	包含層
須恵器蓋	170	21.2	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰色	P94
須恵器高杯	171	26.0	16.0	14.8	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	P94
須恵器蓋（模倣）	172	22.4	—	—	外面ヨコナデ、胴部内面同心円タタキ痕。	含長石・石英	灰白色	P94
須恵器杯	173	—	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	P94
須恵器杯	174	—	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	P94
須恵器壺	175	—	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	P94
須恵器杯蓋	176	15.2	—	2.4	内外面ヨコナデ、天井部ヘラケズリ。	含長石・石英	灰白色	墓1
須恵器杯身	177	11.4	6.0	3.8	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	灰色	墓1
須恵器杯身	178	11.4	7.0	3.8		含長石・石英	灰白色	墓1
土師器杯	179	12.6	7.0	3.6	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ。	含長石・石英	橙灰色	墓1
土師器甕	180	24.8	—	30.4	胴部外面タテハケ後ヨコハケ、内面ヨコハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	茶灰色	墓1
土師器皿	181	18.0	—	—	内外面ヨコナデ、内面に暗文が認められる。	含長石・石英	橙灰色	溝22
須恵器杯	182	10.0	6.0	3.8	内外面ヨコナデ、底部外面ケズリ。	含長石・石英	灰色	溝22
須恵器杯	183	10.0	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰色	溝22

須恵器甕	184	14.6	—	—	内外面ヨコナデ、外面刷突文がめぐる。	含長石・石英	灰色	溝22
土師器甕	185	22.0	—	—	胴部外面タテハケ、内面ナデ、口縁部内面ヨコハケ後内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙灰色	溝22
須恵器鉢	186	—	4.0	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰色	溝22
須恵器高杯	187	15.0	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰色	溝22
須恵器高杯	188	—	9.4	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰色	溝22
土師質土器椀	189	14.5	6.0	4.75	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	乳黄色	溝1
土師質土器椀	190	14.0	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	乳黄色	溝1
土師質土器椀	191	14.2	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	乳黄色	溝1
土師質土器椀	192	15.2	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	乳白色	溝1
土師質土器椀	193	—	6.4	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	乳白色	溝1
土師質土器椀	194	14.0	7.6	4.3	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄橙色	溝1
須恵質土器椀	195	15.2	5.5	5.75	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目。	含長石・石英	灰褐色	溝1
瓦器椀	196	13.8	3.4	4.55	内外面ヘラミガキ、外面下半ナデ、和泉型。	含長石・石英	黒灰色	溝1
瓦器椀	197	14.7	4.3	5.25	内外面ヘラミガキ、外面下半ナデ、和泉型。	含長石・石英	黒灰色	溝1
瓦器椀	198	13.9	—	—	内外面ヘラミガキ、外面下半ナデ、和泉型。	含長石・石英	黒灰色	溝1
土師質土器皿	199	8.5	7.2	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	淡黄灰色	溝1
土師質土器皿	200	8.5	6.7	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	淡橙色	溝1
土師質土器皿	201	8.7	7.0	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	淡灰黄色	溝1
土師質土器皿	202	8.6	7.0	1.9	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	淡橙色	溝1
土師質土器皿	203	9.0	7.0	1.1	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	淡黄橙色	溝1
土師質土器皿	204	9.3	7.4	1.75	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目。	含長石・石英	淡黄橙色	溝1
黒色土器椀	205	9.8	5.5	3.4	内面ミガキ、外面ヨコナデ。	含長石・石英	乳黄灰色	溝1
土師質土器皿	206	9.2	7.6	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目。	含長石・石英	乳黄色	溝1
土師質土器皿	207	10.0	8.0	1.65	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	淡黄橙灰色	溝1
土師質土器皿	208	10.1	7.4	1.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目。	含長石・石英	淡黄灰色	溝1
土師質土器皿	209	9.8	7.2	1.6	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後板目。	含長石・石英	淡黄灰色	溝1
土師質土器皿	210	8.6	6.5	1.7	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	淡橙色	溝1
白磁碗	211	15.8	—	—	口縁部を玉縁にする。釉は黄色を帯びた白色。	—	—	溝1
青磁碗	212	—	4.7	—	釉色はやや黄色気味の鮎色ガラス質である。	—	—	溝1
須恵質土器椀	213	—	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰色	溝1
土師質土器皿	214	7.5	6.3	1.45	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	黄橙色	P174
土師質土器皿	215	7.0	4.6	1.1	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	黄橙色	P174
土師質土器皿	216	7.2	5.55	1.15	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	黄橙色	P174
土師質土器皿	217	7.2	5.1	1.24	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	橙色	P174
土師質土器皿	218	7.45	6.3	1.45	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	橙色	P174
土師質土器皿	219	7.8	6.4	1.85	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	橙灰色	P174
土師質土器皿	220	7.45	6.3	1.45	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	橙灰色	P174
土師質土器皿	221	7.9	6.3	1.1	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石・石英	黄橙色	P174
土師質土器鍋	222	30.4	—	—	外面タテハケ、内面ヨコハケ。	含長石・石英	灰白色	土器焼成面
土師質土器鍋	223	—	—	—	内外面ナデ。	含長石・石英	灰色	土器焼成面
土師質土器鍋	224	—	—	—	内面ハケ後、内外面ナデ。	含長石・石英	褐灰色	土器焼成面
土師質土器椀	225	—	5.2	—	内面ナデ、外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	土器焼成面
土師質土器椀	226	—	6.5	—	内面ナデ、外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	土器焼成面
青磁碗	227	—	—	—	口縁部外面に雷文が認められる。	—	—	土器焼成面
須恵質土器鉢	228	—	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰色	土器焼成面
備前焼壺	229	13.0	15.0	24.6	内外面ヨコナデ、外面下半ケズリ、内面下半ユビ押え。	—	茶灰色	水田層
肥前磁器染付皿	230	—	—	—	見込みは蛇ノ目釉ハギ、コンニャク印判が認められる。	—	—	水田層

第Ⅳ章　結語

ハガ遺跡は今回の発掘調査の結果、７世紀、８世紀～12世紀、13世紀～16世紀の遺構面が存在することが明らかとなった。７世紀と13世紀～16世紀の遺構面については、遺構の配置に規則性や高級陶磁器などの特殊遺物が認められないことから、一般的な集落と考えられる。８世紀～12世紀の遺構面は遺構の配置が規則的であり、しかも長期間にわたって踏襲され、三彩陶器や羊形硯などの特殊遺物も認められることから、国府レベルの官衙関連遺構といえる。

第Ⅲ章では検出した遺構と遺物を３期に分けて説明したが、ここではより詳細に整理してみたいと思う。

Ⅰ．古代１（８世紀～12世紀）

１　遺構の構成

（１）調査区内における区画遺構

検出された遺構のうち、指向する方位が明らかな建物や溝は真北方向に合わせている。まず、プール敷地外周の擁壁部分に対しておこなったＡ～Ｄ区の調査区では、プール敷地西端に相当するＣ区から南北方向の溝や、その溝とほぼ同じ位置に築地塀が構築されている。両者とも同じ方向性を有することから、最初は溝によっておこなわれていた区画施設が後に築地塀に変わったといえる。この区画溝は敷地南端にあるＢ区でほぼ直角に東に折れ曲がる。Ｂ区においては築地塀は検出されなかったが、平瓦や軒瓦が出土していることから、調査区に近接した地点に存在している可能性が高いと推測される。築地塀に先行する区画溝はＢ区の東側へ続いており、調査区敷地外の東側へ伸びていくと考えられる。調査区敷地東端に相当するＡ区の北側でも南北方向の溝が検出された。Ｃ区やＤ区で検出された区画溝は、底部に凹凸もない引水可能な一般的な溝の形態であるが、Ａ区で検出された溝は長楕円形の土壙が連結したような形態で、これは都宇郡衙などに推定されている岡山市津寺遺跡で検出された区画溝で、いわゆる繭溝と呼ばれているものと似ている。プール本体であるＥ区の調査をおこなっていない時点では、溝の形態が全く異なっているものの、同じように南北方向であることから、Ｂ・Ｃ区の溝とＡ区の溝は連結しているとして、東西約60mほどの空間を画する溝が存在すると考えていた。また、この区画のなかを東西に横切っているＡ区では、平面形が方形で一辺の長さが１ｍもある柱穴が３個東西方向に並んでおり、区画内部にかなり規模の大きな建物が存在していたことも予想された。

区画内部を面的に調査したことになるＥ区では、Ａ区の繭溝とセットになる繭溝や掘立柱建物が検出された。その結果、Ａ区で検出されていた繭溝は予想よりも狭い空間を画しているということになり、大きくは２時期、同位置での踏襲を含めると３時期の変遷が認められた。つまり、Ａ区で検出された溝は東西幅約30mの区画を画しているということになる。Ｂ・Ｃ区で検出された溝はこの区画の外側をさらに区画する溝ということになる。繭溝で区画された幅約30mの区画は発掘調査する前でも周囲の水田より一段高く、さらに検出された建物柱穴の底レベルを比較してもこの区画内の方が高いことから、後の水田開発の影響ではなく、もともと高かったと考えられる。

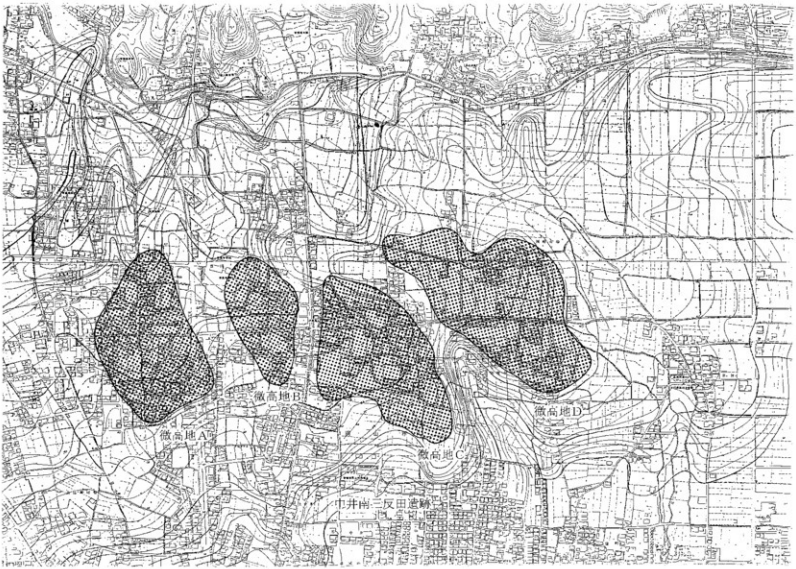


図147　旭川東岸平野北半の微地形

（2）微地形からみた区画の広がり

A～E区の発掘調査の結果、当調査区に幅約30mの区画とそれを囲む区画のあることが推測された。予想される区画は調査区内で完結しないため、周囲の地形や用水の水配り、微地形などを手掛かりとして区画の広がりを追求してみたい。

まず、調査区周辺のおおまかな微地形について、1／2500の岡山市城図に10cm等高線を入れ、さらに現地踏査をおこなって地形の凹凸を確認した図をもとに作成した図（図147）からみてみたい。旭川東岸平野は一見一面的な平野が広がっているようであるが、微視的にみると旭川の支流である旧河道がいくつも埋没しており、それらの周囲には自然堤防である微高地が分布している。雄町遺跡や原尾島遺跡などは、そういった微高地上に形成された弥生時代以来の拠点的な大集落である。ハガ遺跡周辺についても、いくつもの微高地があり、その周囲を旧河道が流れている。最も大きな微高地は、県史跡となっている国庁跡（国長宮）の辺りから、東西方向に４つ並んでいる微高地で、仮に西から微高地A・B・C・Dとする。想定されている古代山陽道は、これら４つの微高地を東西方向に横断するように設定されている（図147）。ハガ遺跡は４つの微高地の中程にある微高地Cの南端に相当するということになる。ハガ遺跡の南約200mの位置にある中井・南三反田遺跡(1)では、５世紀～６世紀にかけての一辺、もしくは径15m前後の小形の方墳や円墳が多数検出された。いずれも上面が削平されており、古墳をめぐる周溝のみが残存している。中井・南三反田遺跡は国府市場周辺を中心とした備前国府想定区域内に含まれることから、それら古墳の削平も国府と関連づける見方もある。ただし、出土遺物も少ないことから、古墳削平の年代については明確でない。図の微地形で見る限り、中井・南反田遺跡は微高地Cの南側斜面部に相当する。微高地Cの南側はかなり大きな旧河道、もしくは低位部が広がっており、それらを埋めて水田化していくとすると必然的に微高地斜面部の中井・三反田遺跡の古墳群などは削平されてしまう。微高地Cの南側には条里地割が広がっており、大規模な水田開発があったと考えられる。おそらく水田開発に伴って古墳群は削平されたと推測される。遺物がほとんど含まれていないことも、国府建設に伴う造成ではなく、水田開発に伴うことを示しているように思われる。

次にA～Dの各微高地上でおこなわれた発掘調査の概要についてふれてみたい。微高地Aは県指定史跡国庁跡があり、古くから備前国府の中枢である国庁に比定されてきた。ただし、国庁比定の根拠である国長宮については、周辺の小字に「長盛」といった中世の負名制の名残と考えられるものがあり、国長もクニナガと読んで、同様に負名制に関係する字名であることが指摘され、この地名と国府とは直接関係ないという考えがある(2)。微高地AはA～Dの微高地群のうち最も旭川に近く、水害の被害も受けやすい位置にある。この微高地上に相当する備前国府推定地（国長）遺跡(3)では、小規模な発掘調査の結果、弥生時代後期から遺構の形成があり、10世紀の遺構も認められるが瓦等の遺物は認められなかった。その他の小規模な立会調査の結果も同様で、古代の時期の遺構や遺物の認められる地点はあるものの、瓦等の国庁の存在を示唆するような遺物は認められない。

微高地Bは想定される範囲が４つの微高地のうちでは最も狭い。しかし、南西端部に相当する地点で発掘調査された南古市場遺跡(4)では、調査区西端で検出された河道から９～10世紀の多量の土器とともに越州窯産輪花皿や、賞田廃寺第Ⅲ様式軒平瓦などが出土した。付近にはこれらの遺物が帰属する建物や施設の存在が推定される。

微高地Cはハガ遺跡の立地する微高地であるが、東側にある微高地Dとの間にある旧河道の痕跡については途中で曖昧となる。当初、微高地CとDは一連の微高地として考えたほどである。しかし、微高地C・D間の北西部と南東部には旧流路の痕跡が明瞭であり、後に微高地C・D間の部分だけ埋められて現況のような地形になっていると推測された。この点については、ハガ遺跡の区画の広がりと極めて大きく関係することであり、後で用水路の分布から追求することにする。

微高地Dは4つの微高地のうち最も広い。しかも旭川から離れており、4つの微高地のなかでは最も安定的した微高地であったといえる。微高地北端の位置に相当する北口遺跡(5)では小規模な発掘調査がおこなわれており、弥生時代から中世の遺構や遺物が出土している。この微高地上には実態のよくわかっていない成光廃寺があり、8世紀後半の軒丸瓦が出土している(6)。この軒丸瓦は賞田廃寺で用いられている軒丸瓦と同文であり、同廃寺はこの瓦の時期に塔基壇が凝灰岩製壇上積になるなどの改築を受け、中央寺院と遜色のない様相を呈するようになったことが明らかになっている(7)。8世紀後半は同廃寺の建立氏族と考えられる上道朝臣氏が中央政界へ進出しており、それと同廃寺の改築は対応していると考えられている(8)。また、上道朝臣氏は備前国の国司にもなっている。

（3）用水路の分布からみた微地形の補正と区画遺構の全形

現況の微地形からハガ遺跡周辺のまとまった広さのある微高地を割り出し、それら微高地の様相を概観したが、微高地Cと微高地Dの間のようにやや曖昧な部分があることも明らかとなった。ハガ遺跡の発掘調査で、発掘調査区のD・E区西側では微高地上の包含層をそのまま切り崩して低い部分を埋めるような水田の大規模開発がおこなわれており、旧地形がかなりの改変を受けていることが推測される。広範囲に現況の微地形を補正することは困難であるが、微高地Cと微高地D間の地形についてはハガ遺跡の区画の広がりに関わることであり、しかも発掘調査によってある程度地形の改変時期も推測できることから、若干検討してみたい。

図148は旭川東岸平野北半の現況の水利系統状況を表したものである。当地における用水路は、近世に於いて整備されたものであるが、主水路である祇園用水、千間溝川、古田樋尻川は基本的には旭川から取水する祇園大樋から扇状に広がっており、扇状地状の自然地形に即している。古田樋尻川が近世以前から存在していたという伝承があることからも、現況の用水路網の原型は近世以前から形成されていたと考えられる。

図148をみると用水路は4つのタイプに分けることができる。

Aタイプ　祇園用水、千間溝川、古田樋尻川などの主水路で、自然地形に即した形状で流れている。

Bタイプ　主水路から派生する用水で、自然地形に即した形状で流れている。

Cタイプ　主水路から派生する用水で、条里に即した形状で流れている。

Dタイプ　円藏寺川などの主水路で、東西方向の条里に即している。

Aタイプは基本的に古くから存在する河道を利用したものと考えられ、Bタイプも同様に地形に即した開発といえる。両者は弥生時代以来の開発の原理によっているといえる。Cタイプは当然条里制施工後、あるいは施工時の開発であり、国府市場の東側にある四御神付近にある水田地帯には普遍的に分布している。Dタイプについても同様といえる。条里方向の規定の有無だけから見るとA・Bタイプ→C・Dタイプといった順序が想定される。

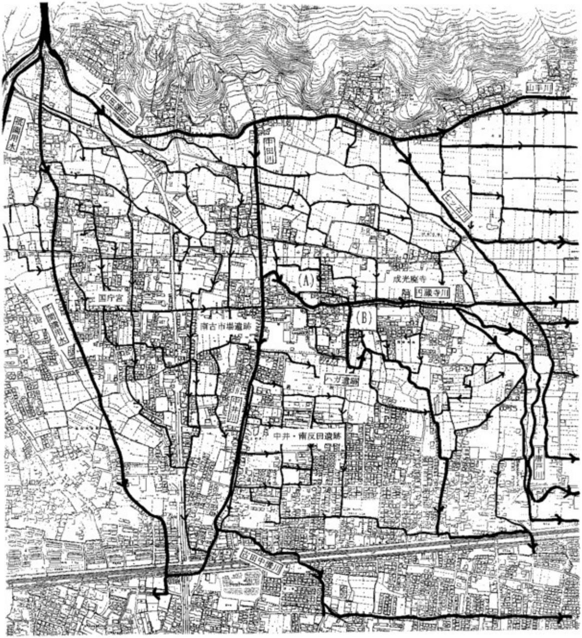


図148 旭川東岸平野北半水利系統図

次に開発面積の点からみてみたい。Ａタイプの用水路から取水するという点ではＢタイプもＣタイプも同じであり、Ｂ・Ｃタイプの開発面積はＡタイプの用水の量や取水する地形などに規定される。Ａ、Ｂ、Ｃタイプの用水による開発は全体からみると木の幹と枝葉の関係とよく似ている。用水路の水源となる旭川が木の幹、Ａタイプの用水路が枝、主水路であるＡタイプの用水路から取水するＢ・Ｃタイプの用水路が葉というわけである。大規模な地形の改変をおこなわず、旧地形を最大限利用した開発はＡ・Ｂ・Ｃタイプの用水路で完結しているといえる。より多くの水田開発をおこなおうとするならば、用水路網の末端となるＢ・Ｃタイプの用水路の余水を利用し、いわば葉と葉の間の部分を開発するほかはない。その開発をおこなったのが条里に沿って東西方向へ流れるＤタイプの用水路なのである。つまり開発面積の点からみると、Ｄタイプの用水路が最も新しい水田開発に用いられた用水路といえる。そうすると、水路の形状や開発面積の点からみると、Ａ・Ｂタイプ→Ｃタイプ→Ｄタイプ、の３段階の順序が想定される。

ハガ遺跡の発掘調査において、水田開発の点からみてみると中世後半（16世紀）頃に調査区西半から南側にかけての低い部分が水田化される。水田畦畔等が検出されなかったため、水田景観の詳細は不明だが、用水路と推測される溝が条里方向に即していることからも、現況の水田景観に近いものであった可能性が高い。つまり、Cタイプの用水路による開発の可能性が高い。その後、数層の水田層が認められるが、基本的には中世後半の水田層の分布と重複している。ところが18世紀になると、水田化されていない微高地の高い部分を大きく削りとって地下げをおこない、削平した土砂は低い水田の地上げに用いている。地上げをおこなった土砂は、多量の遺物を含んでおり、調査当初はオリジナルな包含層と考えた程である。おそらく、大規模な水田開発の結果を示していると考えられる。したがって、この水田開発は既存の水路の改修程度ではないといえる。おそらく、調査区の北を東西に流れる円蔵寺川の掘削に伴っておこなった開発と推測され、Dタイプの用水路による開発である可能性が高い。

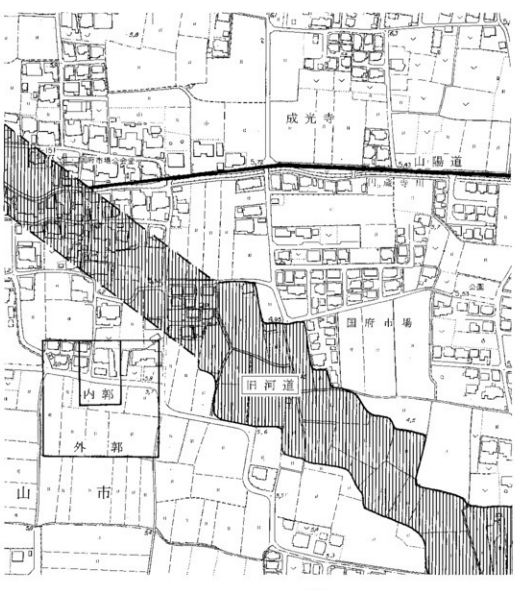


図149 ハガ遺跡の区画の範囲

そうすると、ハガ遺跡の調査からCタイプが中世後半、Dタイプが18世紀頃といった年代が与えられ、とくにDタイプについては抵圃用水の整備がおこなわれた時期(9)とも近く、それに伴う、あるいは連動した水田開発である可能性が高く、近世における水田開発の一端がうかがえる。

ここで問題となるのは、円蔵寺川の形状である。古田用水から南下する中田川から分岐した円蔵寺川は、自然流路的な流れの後、東へ向きを変えて条里にそって流れている。ところが、自然流路的な部分（図148－A）の南への延長部分はハガ遺跡の北側で途切れるものの、ハガ遺跡の東側で、延長部分（図148－B）の旧流路が認められるのである。この部分の小字名は「沼」、「上沼」などで、低位部であったことを示している。当初、途切れている部分は周辺の標高と同じであることから微高地と考え、ハガ遺跡の北には微高地が続いていると考えていた。しかし、ハガ遺跡の調査で水田開発過程と時期が明らかになったことにより、途切れている部分は本来は旧流路で、円蔵寺川を付け替えた時点に円蔵寺川を掘削した土砂等で埋められた可能性が想定された。この開発は18世紀と考えられることから、18世紀以前にはハガ遺跡の北側にはかなり広い幅の流路が存在していたということになる。流路の幅は、（図148－B）付近の旧流路の痕跡と考えられる低い水田の分布から50～60m程と推測される。

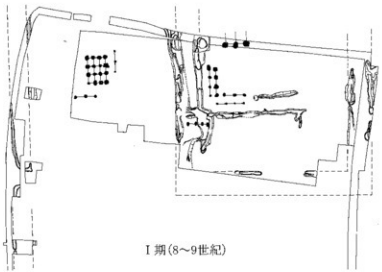
そうすると、先に検討したハガ遺跡の区画についても、この流路が北限や西限になるということになる。B区とC区が外郭の区画の西限と南限となるとすると、この方向性は現況の地割と重なる。そして、一町四方の区画とするならば、推定される流路のちょうど西側でおさまり、しかも、東限は比較的大きな畦畔で生活道になっている地割と重なる。つまり、ハガ遺跡の区画は図149で示すように、一町四方の外郭と幅30m（約1/3町）の内郭によって構成される可能性が高い。そして内郭については、調査区の北側が幅30mの内郭の延長線上に高くなって畠に利用されていることから、この畠を内郭の痕跡と推測すると、内郭は幅約30m、長さ約60mの規模の可能性が高いということになる。

（4）遺構の変遷

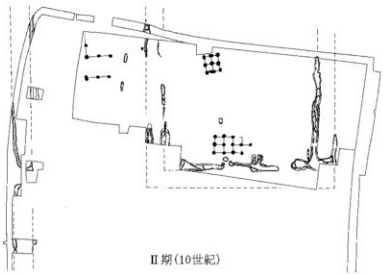
ハガ遺跡の広がりは、一町四方の外郭に東西1/3町、南北2/3町の内郭が存在すると予想されたが、今回の調査では外郭線の東側と西側の半分、内郭の南約1/2を調査したことになる。遺構の切り合いや出土遺物の検討から、8世紀～12世紀までの時期幅のなかで3小期の遺構の変遷が確認された。以下、各時期ごとに遺構の内容を説明する。

Ⅰ期（8～9世紀）

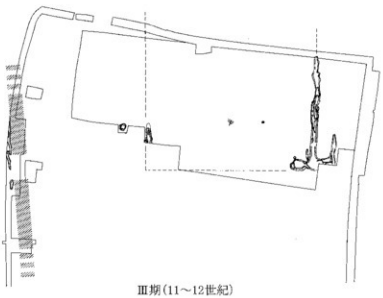
内郭は2本の平行する溝によって画されている。溝間は約2mで、芯心間では約4mである。ただし、溝は土壌を連続したような、いわゆる繭溝である。南西コーナー付近は内側の溝が鉤の手状に曲がっており、さらにその部分へは内郭を区切る溝と柵列がある。内郭への出入り口であった可能性が高い。ただし、内郭南辺の区画溝は中央付近がブリッジ状に途切れており、さらにその北側には目隠し塀と思われる柵列があることからも正面入り口は南側と考えられる。建物については調査区の北端で一辺が1m前後もある方形掘り方の柱穴が3つ東西方向に並んでおり、調査区外の北側へ続くものと考えられ、内郭の北半にはかなり規模の大きな建物が存在しているものと推測される。内郭は外郭と比べると、現況の水田面でも約0.3mほど高くなっている。また、内郭と外郭で検出された柱穴の底レベルを比較しても内郭の方がかなり高い。内郭部分はもともと外郭よりも一段高かった可能性が高い。外郭も内郭と同様に2本の平行する溝によって画されているが、内郭と比べると溝の規模が若干



Ⅰ期(8～9世紀)



Ⅱ期(10世紀)



Ⅲ期(11～12世紀)

図150　ハガ遺跡古代遺構変遷図

貧弱な印象が強い。ただし、調査区の関係上、内側と外側の溝を同時に検出した部分がないことなどによる可能性もある。溝間は約3.5mで、芯心間では4～5mと推測され、溝間は内郭溝よりもやや広い。建物は3間×3間の総柱建物が検出されている。また、調査区の南東部では方形の炉状遺構もあり、鉄滓なども出土している。

遺物はⅠ～Ⅲ期のうちでは最も多い。大半は内郭溝から出土したもので、多くの土器とともに焼土塊が比較的多く含まれることや、Ⅱ期で若干西側へ位置をずらした内郭溝をⅢ期も踏襲していることから、Ⅰ期の内郭は火災等によって少なからず被害を受け、Ⅱ期に大規模な建て替えがおこなわれたものと推測される。そのため、Ⅰ期の内郭溝には焼け残った多くの遺物が埋められたものと考えられる。出土遺物は須恵器、土師器が大半であるが、三彩陶器多口瓶や羊形硯、鴟脚硯などの極めて特殊な遺物もある。出土土器の器種としては杯とⅢが大半を占め、杯についてはほぼ全てに灯明痕が認められる。このような土器は仏教行事の1つである法会に用いられたと考えられる。また、瓦塔や仏器の1つである瓦鉢も出土していることから、寺院的な性格がうかがわれる。さらに完全な瓦葺建物が存在していたと思われる程の量ではないが、軒瓦や平瓦も出土している。一方、外郭部分からは炉状遺構や、Ⅱ期ではあるが坩堝などを投棄した土壙が検出されたことなどに示されるように、外郭は工房的な性格がうかがわれ、内郭と外郭では性格が異なっていたように思われる。周囲より一段高くしたことからも内郭を主、外郭を従とすると、ハガ遺跡の古代の遺構面は寺院的施設と、それに伴う工房といった評価が妥当ではなかろうか。この構造はⅡ期やⅢ期も共通している。

Ⅱ期（10世紀）

内郭が約7m西へ移動する。ただし南限についてはほとんど変わっていない。この位置はⅢ期も踏襲される。ただしⅠ期のように内郭南端を区切る溝や柵列は認められない。内郭南端中央には2間×3間の建物があり、この建物の前面では区画溝が鉤の手状に曲がっており、さらに深さも浅くなっている。建物の位置や溝のありようからも、この建物が内郭の南門であった可能性が高い。そうすると八脚門ということになる。そのほか、調査区北側で2間×2間の総柱建物が1棟検出されている。

外郭については柱穴が若干検出されているものの、調査区内では明確な建物は検出されなかった。ただ長方形の土壙から完形の坩堝や緑釉陶器碗を投棄した土壙が検出されており、外郭の工房的性格がうかがわれる。Ⅲ期ではあるが外郭で検出された井戸埋土には炉壁片が多量に含まれており、外郭のそういった性格は一貫していた可能性が高い。

Ⅲ期（11～12世紀）

内郭の位置はⅡ期と変わらない。全体的に遺構の残存状態が良好でないため、区画溝についても断片的であるが、基本的にはⅡ期の区画溝を掘り直して用いている。建物については柱穴等が認められないことや、この期に属すると考えられる瓦が最も多く出土していることから、礎石建物等になっていた可能性が高い。

外郭についてはそれまで2本の平行する溝であったものが築地塀に変わる。位置はⅠ・Ⅱ期の外郭溝と変わらない。築地塀の基部は台形の盛土をおこない表面に礫を葺いており、かなり堅固なものである。ただし、Ⅰ・Ⅱ期の外郭溝についても築地の雨落ち溝である可能性が高く、より規模を大きくした築地に改築したという可能性が高い。建物等は検出されなかったが、調査区の南端から井戸を一基検出した。井戸の埋土には炉壁片が多量に含まれており、外郭の工房的性格が踏襲されていたことがうかがわれる。

近世の水田開発によって大きく削平されたと考えられる包含層の２次堆積土が内郭の周囲に認められるが、この中から泥塔がかなりの個体数出土した。この２次堆積土は本来内郭にあったものと考えられ、泥塔も内郭を中心に埋設していた可能性が高い。泥塔とは、平安時代中頃以降から盛んに仏前に供養納置したものであり、泥塔供養に関する文献でも多く認めることができる。しかし、県下においては出土例は少なく、地方で盛んにおこなわれていたというよりも、都的な仏教行事ということがいえるのかもしれない。ただ泥塔が多く出土したことは、内郭が寺院的性格をⅠ期以来踏襲していたことを示しているといえる。つまり、Ⅰ期からⅢ期までハガ遺跡の構造や性格には大きな変更がなかったといえる。

注

（1）桑田俊明「中井・南三反田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』92　1994年
（2）高橋　護「古地形から見た備前国府」『岡山県埋蔵文化財報告書』二　1972年
（3）河田陡司「備前国府推定地（南園長）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1996（平成８）年度　1998年
（4）公民館建設に伴って岡山市教育委員会が発掘調査をおこなった。
（5）宇垣匡雅「北口遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1999（平成11）年度　2001年
（6）厳津政右衛門「成光寺跡」『岡山市史』古代編　岡山市役所　1962年
（7）出宮徳尚ほか『賞田廃寺発掘調査報告』賞田廃寺発掘調査団　1971年
（8）出宮徳尚「古代寺院」『岡山県の考古学』吉川弘文館　1987年
（9）加原耕作「農学」『岡山県史』第七巻　近世Ⅱ　1985年

２　出土瓦について

調査区内からは軒瓦がコンテナ（60cm×40cm×深さ15cm）３箱、平瓦が30箱ほど出土した。ここでは出土した軒瓦を分類し、それらの類例や平安宮の様相と比較して年代を推測したい。また、平瓦についてもタタキの種類や布目の本数で分類し、その傾向について整理したいと思う。

（１）軒瓦（図151）

軒丸瓦は６種類ある。

１類は複弁８弁蓮華文である。中房は若干突出し、花弁との間には凹線がめぐる。蓮子は円錐形で数は１＋６＋８である。外縁には面違鞠線文が施されている。焼成は良好で、須恵質である。内郭溝からほぼ完形に近い個体が１点出土した。

２類は複弁蓮華文で、いわゆる平城宮六二二五式系の軒丸瓦である。文様はレリーフ状であり、外区には陰起鋸歯文が施されている。内郭から１点出土した。

３類は複弁４弁蓮華文である。文様はかなりバランスが悪く、瓦当整形後に瓦当笵を押しつけたことがうかがわれる。瓦当裏面には布目が明瞭に残っており、丸瓦の端部を折り曲げて瓦当面としたいわゆる「一本造技法」で成形されている。間弁は花弁を1/2切断したものであり、全体として複弁８

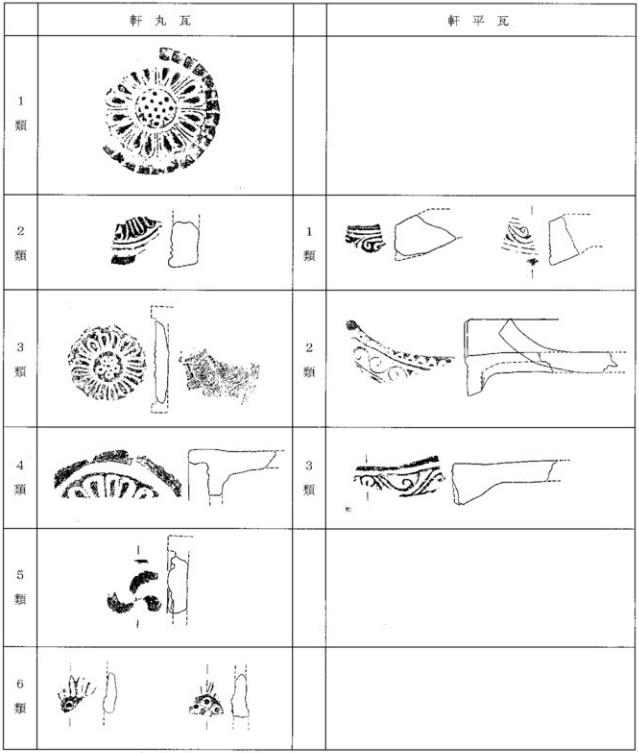


図151　ハガ遺跡出土軒瓦分類

弁蓮華文の縮小、あるいは圧縮した文様といえる。中房は丸く盛り上がり竹管状の１＋５の蓮子を配する。外区については残存しているものがないため不明。内郭と外郭から３点が出土している。焼成はバラエティーがあり、軟質な須恵質のものから瓦質のものまである。

４類は単弁蓮華文で、大小の２種がある。中房まで残存しているものがないことから全形は不明だ

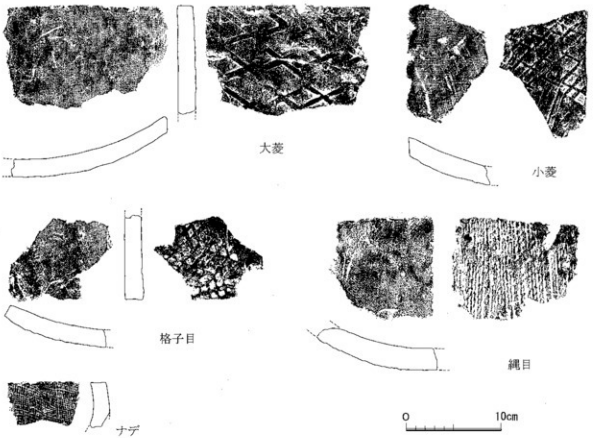


図152　ハガ遺跡出土平瓦分類

が、今回出土した軒丸瓦のうち出土点数では最も多い。花弁は突線のみで表現されており、全体に平面的な感じをうける。焼成はバラエティーに富み、軟質なものから硬質の須恵質のものがある。

5類は巴文で、極めて小片しかないため全形は不明だが、中央にいわゆる円点が認められる。焼成は堅緻で須恵質である。

6類は極断片的であるため全形は不明だが、複弁蓮華文の可能性が高い。

軒平瓦は3種類ある。

1類は唐草文で、いわゆる平城宮六六六三式系の文様の陰陽を逆転させたものである。文様構成や大きさなどはかなり忠実である。5点が出土しているがいずれも小片である。

2類は唐草文で、外・脇に界線が施されている。上外区には外向凸鋸歯文を配している。曲線顎で、瓦当裏面はユビナデもしくはヘラナデがおこなわれている。焼成は軟質の須恵質と瓦質のものがある。

3類は唐草文で、上下の外区には界線を配しており、中心飾が認められることから、均整唐草文である可能性が高い。また文様の突線の幅が細いものと、太くやや雑なものの2種が認められる。曲線顎で、瓦当裏面にはヘラナデが明瞭である。平瓦凸面には大きい格子タタキが残る。焼成はバラエティーに富み、須恵質のものから瓦質のものまである。出土点数は軒平瓦のなかでは最も多く、7点が出土した。出土地点も調査区全体にあり、特に集中するような傾向はなかった。

（2）平瓦（図152）

平瓦はコンテナ30箱ほどで個体数にして229点出土したが、完形に近い数点を除くと全て破片で、

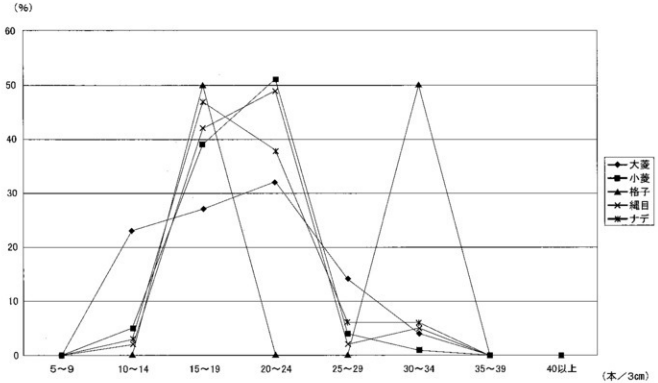


図153　平瓦類型別の布目系数による破片数割合

同一個体の同定さえも困難であるものが多い。しかしながら、ある程度の傾向を読みとることを目的として凸面のタタキの種類と個体数割合、及び3㎝四方における布目の数を計測した。タタキの種類は格子目、縄目、菱形、ナデに分け、菱形は、長軸が3㎝以下を小菱、3㎝を越えるものを大菱に分けた（図152）。

タタキは最も多いのが小菱で、全体の半分である55%を占める。ついで縄目の20%で、大菱とナデは、それぞれ10%、14%である。格子目は1%にすぎない。小菱タタキを施した軒平瓦は2類と3類で、特に3類は出土軒平瓦のうち最も多い。また、2類も今回出土した軒平瓦のなかでは3類に次いで多い。軒平瓦と平瓦の出土点数の傾向が一致しており、このことは軒平瓦2類と3類の時期に、ハガ遺跡では、多くの瓦を用いた改修がおこなわれていたことを示唆している。

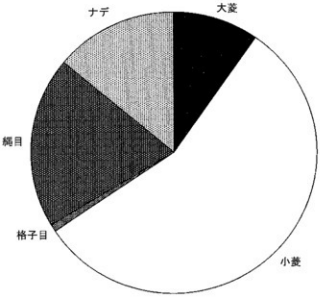
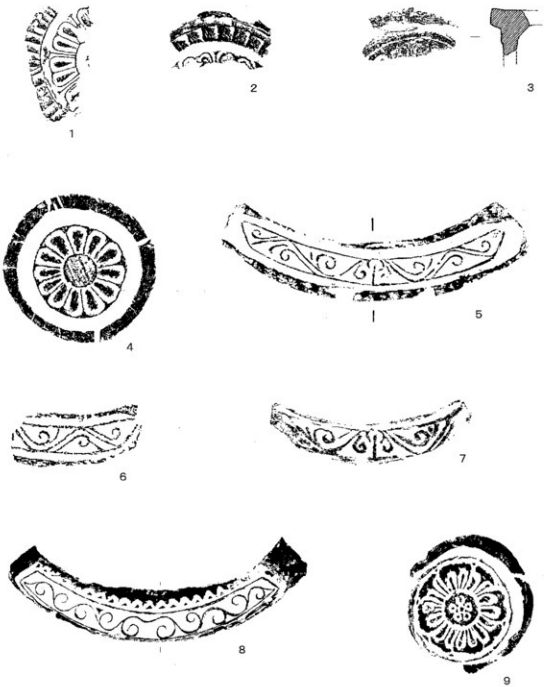


図154　平瓦類型別破片数割合

布目の本数については大体15～24本に集中する傾向が認められるが、大菱が若干少なめ、格子目が

多めの傾向がある。わずかな差による比較になるが、本数の多い傾向のタタキがより古いという序列を想定すると(1)、格子目→縄目→小菱→ナデ→大菱ということになる。



1 油掛神社（熊山遺跡）
2 寺奥(廃寺)遺跡
3 北方中溝遺跡
4 平安京
5 備前国分僧寺
6 平安宮内裏内郭回廊
7 服部廃寺
8 服部廃寺
9 服部廃寺

図155　ハガ遺跡出土軒瓦の類例

（3）軒瓦の組み合わせと時期

軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせについては、軒丸瓦２類と軒平瓦１類はまず間違いないと考えられる。軒丸瓦１類はいわゆる川原寺式軒丸瓦の範疇に入るもので、全く同じ文様の軒丸瓦が方形の石積遺構のある鴨山町鴨山遺跡に近接する油滝神社(2)や、備前市寺奥(廃寺)遺跡(3)からも出土しており、川原寺式の軒瓦の地方的な変容である可能性が高い。したがって、今回の調査区からはこれに組み合う軒平瓦は出土していないといえる。軒丸瓦のうち最も多く出土したのは、軒丸瓦では４類で、軒平瓦では３類である。両者は焼成も似ており組み合う可能性が高い。軒丸瓦４類については同じ文様の軒丸瓦が岡山市北方中溝遺跡(4)の包含層で出土しているが、他に当地域では類例がなく、時期を決める手掛かりはない。しかし、ほとんど同じ文様の瓦が平安京(5)で出土しており、それは山城産の平安時代後期のものとされている。また、軒平瓦３類は備前国分僧寺(6)で全く同文のものが出土しており、長船町服部廃寺(7)からも同じ文様であるが、両端の唐草文を一単位切り落としたものが出土している。そして、この軒平瓦は平安宮内裏内郭回廊(8)でも出土しており、11世紀後半の年代とされる(9)。そうすると、軒丸瓦４類と軒平瓦３類の組み合わせは時期的にも矛盾がなく、しかも最も多いことから、この時期においてハガ遺跡にかなり大規模な改修がおこなわれたことも推測させられる。

そうすると、消去法でいくと軒丸瓦５類は12世紀末以降であり、これに組み合う軒平瓦は今回の調査では出土していない。すると残りの軒丸瓦３類と軒平瓦２類が組み合う可能性が高い。両者とも長船町服部廃寺から出土しており、組み合う蓋然性が高いといえよう。この組み合わせの軒瓦の時期を決める手掛かりは、軒丸瓦の成形技法である。軒丸瓦３類は瓦当裏面に布目が認められることや、瓦当成形後に瓦当笵を押しつけていることから、典型的な「一本造技法」と考えられる。この技法は平安時代前期末からおこなわれはじめ、平安時代中期に盛行するとされる(10)。このことから、軒丸瓦３類は10世紀前後の時期が考えられる。軒丸瓦６類については極小片であるため詳細な検討はできないが、服部廃寺出土の５類の軒丸瓦と同じ様なモチーフである可能性が推測される。

（4）小結

出土した軒瓦の検討から、軒丸瓦１類（A期）→軒丸瓦２類・軒平瓦１類（B期）→軒丸瓦３類・軒平瓦２類（C期）→軒丸瓦４類・軒平瓦３類（D期）→軒丸瓦５類（E期）の変遷が辿れ、A期が７世紀末、B期が８世紀中葉以降、C期が10世紀、D期が11世紀後半、E期が12世紀末の年代が考えられる。これを遺構の変遷で示した時期にあてはめてみると、Ⅰ期がA期とB期、Ⅱ期がC期、Ⅲ期がD期に相当する。軒丸瓦１類の存在から、Ⅰ期が７世紀末まで遡る可能性があるといえる。また、Ⅲ期において掘立柱建物が認められないことを、礎石を用いた建物に建て替えられた可能性を想定したが、Ⅲ期の軒瓦が最も多いことや、この時期に相当すると推測される小菱タタキの平瓦が出土平瓦の半分以上を占めることからも、その考えを支持させる。

軒瓦の文様の比較から、ハガ遺跡は備前国分僧寺と服部廃寺と同文のものがあることがわかった。ハガ遺跡は想定されている備前国府域に含まれることや、三彩陶器多口瓶や羊形硯などの極めて特殊な遺物も出土していることから、備前国府関連官衙であることはまず間違いない。したがって、備前国分寺の瓦との同文関係は不自然でないといえる。またその同文瓦が平安宮にあることも、平安時代

後期において各地の国司が成功を目的として平安宮や寺院の建築に参加しており、その結果各地の瓦が都に集積されているということと一致する。つまり、平安宮の同文瓦は備前国司によって搬入されたと考えられる。

服部廃寺についても備前国司との関係によって説明できる可能性がある。服部廃寺は白鳳期創建の氏寺で14世紀頃まで存続している。一般的な古代寺院と比べ存続時期が長い。発掘調査によって講堂と金堂が南北に並ぶことが確認されており、四天王寺式の伽藍配置になる可能性が推測されている(11)。服部廃寺の北に隣接する備前国和気郡香登郷で、久安二～長寛二年（1146～1164）に備前国衙と住民との間で争論がおこった。この時香登郷は荘園である香登荘になっており、この争論は国衙対荘園といった構図であった。争論は香登荘の南側にある国衙領が、西側を流れる吉井川からの洪水によって水浸しとなったため、国衙は香登荘の横に大堤を築いて、国衙領内へ水が入るのを防いだ。ところがその大堤で国衙領は助かったが、今度は香登荘が大堤のために洪水の被害を受けてしまったのである。その被害の補償のために、国衙領のうち二〇町八反を便補することになった。それは服部新荘といわれ、現在も長船町の北側にある備前市の新庄地区として行政区に反映されており、これは江戸時代の絵図にもうかがわれる(12)。服部廃寺はこの新たな香登荘域となった服部新荘との境で、国衙領側に位置するのである。荘園と国衙領とを画する国衙の寺院としての役目を負っていたと推測され、それが古代寺院としては例外的に中世以降も存続していた理由の１つになるのではないかと考えられるのである。つまり、創建は氏寺であったが、後に国衙の寺として用いられたため、備前国分寺やハガ遺跡と同文の瓦を使用していたのだという解釈も可能のように思われる。

以上のことから、８世紀において備前国府を中心に平城宮式系の軒瓦が国府関連官衙や寺院に分布することはすでに指摘されているが(13)、11世紀後半を中心とした平安時代後期においても、国府を中心とした瓦の需要と供給が活発におこなわれていたことを、ハガ遺跡と同文関係にある瓦は示しているといえよう。

注

（1）石田茂作『仏教考古学論考－寺院編一』思文閣出版　1978年
（2）守時桂太「備前熊山南麓の瓦」『吉備考古』第八十六号　1953年
（3）田代健二「備前市内採集の遺物について」『古代吉備』第10集　1988年
（4）岡田　博ほか「北方中溝遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告書』126　1998年
（5）財団法人京都市埋蔵文化財研究所『木村捷三郎収集瓦図録』1996年
（6）伊藤　晃ほか「備前国分寺跡緊急発掘調査概要」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』10
（7）池田　浩ほか「服部廃寺」『長船町埋蔵文化財発掘調査報告書』２　1997年
（8）近藤喬一編『平安京古瓦図録』平安博物館　1977年
（9）上原真人「古代未期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13、14　元興寺文化財研究所　1978年
（10）木村捷三郎「平安中期の瓦についての私見」『延喜天暦時代の研究』吉川弘文館　1969年
（11）注７
（12）中野栄夫「香潅荘の成立」『岡山県史』古代Ⅱ　1990年
（13）高橋美久二「山陽道古瓦の系譜」『新修国分寺の研究』第四巻　吉川弘文館　1991年
　　草原孝典『新道遺跡』岡山市教育委員会　2002年

3　ハガⅠ期の土器群について

Ⅰ期の内郭溝からは多くの土器が出土した。埋土に焼土塊などが混じることや、土器に完形品が多く含まれることから、火災等の後片付けの痕跡と推測された。以降、重層的に遺構が形成されていることから、溝埋土の上層から上面にかけての遺物については厳密な区別が困難であったが、Ⅰ期の内郭溝から出土した土器群については、大枠では短期間の時期幅でおさまると理解される。そこで、この土器群の構成を整理し、土器群の時期を検討したい。

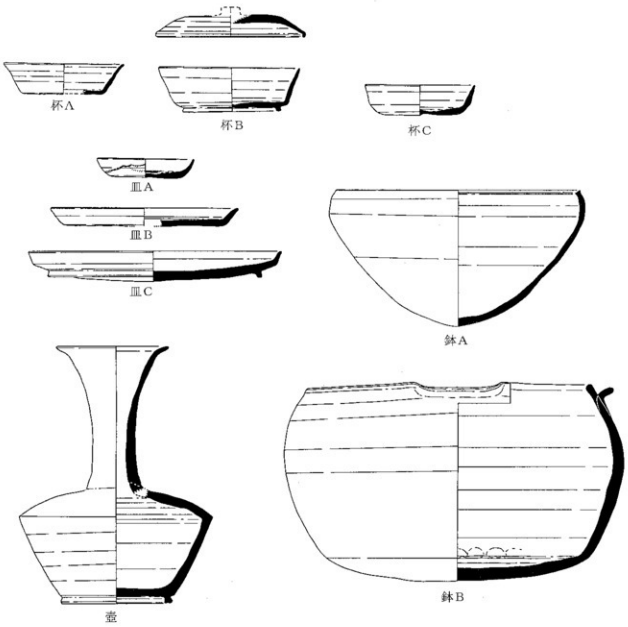


図156　ハガⅠ期の須恵器

（1）器種構成（図156、157）

出土した土器は三彩陶器、須恵器、土師器がある。三彩陶器は多口瓶である。破片であるため明確ではないが、別個体と思われる口縁部があることから少なくとも2個体は存在していたと考えられる。須恵器は杯、皿、鉢、壺、甕があり、土師器は杯、皿、高杯、蓋、甕がある。土師器については畿内からの搬入品も認められる。ただし圧倒的に多いのは、須恵器の杯で、全てに灯明痕が明瞭に認められる。これは遺跡の性格を反映していると考えられる。以下、須恵器と土師器について器種ごとに説明する。

須恵器

〈杯〉

高台が付かず、薄手で底部外面がヘラ切り後押圧されている杯Aと、高台が付く杯B、高台が付かず厚手で底部外面がヘラ切りのままである杯Cがある。杯Bのみに蓋があり、中央にあるつまみの形状は碁石状と円柱状になるものがある。杯Bは法量から2種類に分けられ、口径が15cm前後、器高が5cm前後がⅠ種、口径12cm前後、器高4cm前後がⅡ種である。杯Cは最も多く出土し、ほとんど全ての口縁部内端には被熱痕が認められることから、灯明皿として用いられたと考えられる。口径10～11cm前後、器高3.0～3.5cm前後である。

〈皿〉

口縁端部が内蛯する皿A、口縁端部が外反し高台のつかない皿B、口縁端部が外反し高台のつく皿Cがある。皿Aは調整が杯Cとよく似ていることや、灯明に用いられたことによる被熱痕が認められることから、杯Cの法量分化したものと考えることも可能かもしれない。皿Cは口径が15cm前後と20cm前後の2種がある。皿Bについては、平安京や長岡京から出土した8世紀末から9世紀初頭の時期の資料のなかに認めることができる。

〈鉢〉

いわゆる鉄鉢形のものである鉢Aと、底部が平底気味で片口のある鉢Bがある。鉢Bは瓦質であり法量も大きいことから、いわゆる仏器の瓦鉢に相当するものと考えられる。

〈壺〉

ほぼ完形のものが1点と、下半部が1点出土している。両方とも長頸壺である。高台が若干細身で、底部外縁よりも、やや内側に貼付される。

〈甕〉

短く外側に屈曲する口頸部をもつ甕Aと、「く」字形に外側に折れ曲がる甕Bがある。

土師器

〈皿〉

口縁端部が外反する皿Aのみで、口径が20cm前後と9cm前後の2種がある。どちらも丹塗りである。

〈椀〉

精製された胎土で薄手につくられた椀Aと、手づくね状の成形で内面には荒いハケ調整が認められ

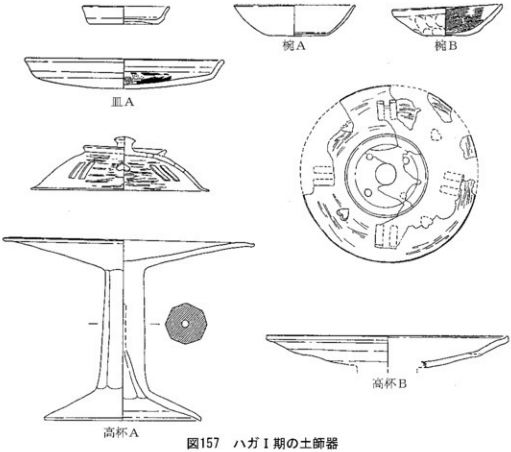


図157　ハガⅠ期の土師器

る椀Bとがある。法量的には共通しており、椀Bは椀Aを模倣した可能性が高い。

〈高杯・蓋〉

高杯は口縁端部が外反する高杯Aと、やや内腕気味に外反する高杯Bがある。両高杯とも胎土を異にしており、また、在地の土器の胎土とも異なる。

蓋は1点で、円形、長方形、ハート形の透かし孔があり、極めて薄手である。内面にはススが付着しており同様のススが高杯Aの杯部上面に認められることや、胎土についても高杯Aとよく似ていることから、高杯Aの蓋と考えられる。緑釉陶器には同様の透かしを施した香炉があり、おそらく高杯Aと蓋は香炉として用いられたものであろう。

〈甕〉

「く」字形に外側に折れ曲がる口頸部をもち、口縁端部が上方につまみ上げられたものと、斜め下方に若干拡張されたものがある。いずれも外面がタテハケ、口縁部内面はヨコハケが認められる。

（2）器種ごとの変遷

ハガⅠ期の土器群と年代が推測できる他遺跡出土の資料とを比較したい。ただし、全ての器種を比較できる程も出土器種が豊富でないため、杯Cと長頸壺に器種を限定したい。

まず杯Cであるが、この器種は器形の調整の特徴から、7世紀以来の蓋杯の杯身の系譜につながる最後の杯と考えられる。この土器群の時期以降は認められなくなる。まず8世紀中葉の資料である津寺遺跡の長方形区画溝出土の土器群(1)と吉野口遺跡の区画溝出土の土器群(2)の杯Cの法量をみてみると（図158）、口径は10～14cm前後に分布するがとくに13～14cmに集中する。器高は4～5cm前後に

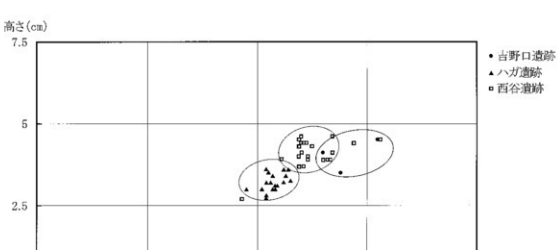


図158　杯C法量表

分布する。次に西谷遺跡の土器群(3)からみてみたい。西谷遺跡の土器は若干伴う畿内産土師器の時期から８世紀前葉に位置づけられているが、杯Ｂの形態やその他の器種構成などから８世紀中葉～後葉の時期の方が妥当と考えられる。杯Ｃの法量についても口径は10～14cm前後に分布するが、12～13cmの間に集中する傾向があり、器高は４cm前後に集中する。津寺遺跡や吉野口遺跡の土器群と比べると法量が縮小している。ハガⅠ期の杯Ｃの法量をみると口径が10～11cm、器高が３cm前後であり、西谷遺跡の土器群よりもさらに法量が縮小している。杯Ｃの法量の縮小傾向から、津寺・吉野口遺跡土器群→西谷遺跡土器群→ハガⅠ期土器群の段階が想定される。

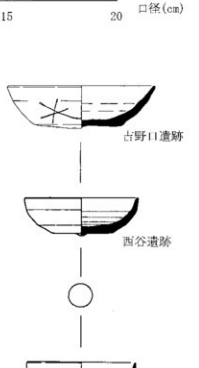


図159　杯Ｃの変遷

次に長頸壺についてみてみたい。ハガⅠ期の長頸壺の最も古い形態は、寒風１号窯の灰原から出土している。この灰原の土器群は含まれている杯の形態から７世紀初頭～８世紀初頭の時期幅が想定されている。長頸壺は７世紀末～８世紀初頭の時期とされる(4)。胴部上半に施文をおこなった古い傾向を示すものと、施文をおこなわない新しい傾向を示すものがある。胴部屈曲点を境として胴部の比を求めると、上半：下半は１：２の比となる。８世紀前葉の良好な資料はないが８世紀後葉の西谷遺跡の土器群では施文をおこなうものはなく、胴部上半と下半の比は１：３になる。ただし高台は断面長方形で高さも高く、底部外縁に貼付される。ハガⅠ期の長

頸壺も胴部上半と下半の比は１：３で西谷遺跡と共通するが、高台は低くなり断面形も台形となる。長頸壺の施文の有無や、胴部上半と下半の比、高台の形態から寒風１号窯灰原（寒風Ⅳ式）→○→西谷遺跡→ハガ遺跡の段階が想定される。

以上から、ハガ遺跡Ⅰ期の土器群は西谷遺跡の土器群の次に位置づけられることが確認できた。さらに詳細な時期を推測する手掛かりとして、都城の土器との比較をしてみたい。ただし、その比較は在地の土器では共通点よりも相違点の方が顕著であるため、畿内から搬入された土器を抽出することでおこないたい。畿内からの搬入品は高杯と椀である。高杯は２点あるが、両方とも胎土が異なる。口縁端部の形態も異なり、脚柱部の成形も粘土紐を巻き上げたものと、心棒に粘土を巻き付けたものとに分かれる。近畿地方の高杯の地域差を指摘した成果(5)から、高杯Ａは山城型、高杯Ｂは大和型と考えられる。椀Ａは平安京出土のものとよく似ている。胎土も在地の土器とは異なっており、搬入品と考えられる。したがって椀Ｂは搬入された椀Ａを模倣した在地の土器の可能性が高い。高杯・椀は平安京の土器編年では平安京Ⅰ期中の時期である(6)。実年代では８世紀末～９世紀初頭である。このほか搬入品かどうかは不明だが、須恵器皿Ｃは平安宮内裏外郭ＳＸ４出土の土器群(7)のなかに認められる。そして、それより後出する資料とされる洛北栗栖野21号窯(8)出土の須恵器皿Ｃが口縁端部を外反気味にしていることからも、ハガⅠ期の須恵器皿Ｃは平安宮内裏外郭ＳＸ４の土器群と平行すると考えられる。平安宮内裏外郭ＳＸ４の土器群は８世紀末の時期とされる(9)。

（３）ハガ遺跡Ⅰ期の実年代

ハガⅠ期の土器群は、８世紀後葉と考えられる西谷遺跡の土器群よりも後出的要素が認められ、さらに畿内から搬入された土器の示す年代から、８世紀末～９世紀初頭の時期と考えられる。三彩陶器はもう少し古い時期であると思われるが、より古い時期と考えられる軒丸瓦も出土していることから、土器群の大半はハガⅠ期の遺構の廃絶時期を示しているものの、そのなかにハガⅠ期の開始期の瓦や、伝世された遺物も含まれていると考えられる。いずれにせよ、内郭溝から出土したハガⅠ期の土器群は、該期の極めて良好な資料といえる。

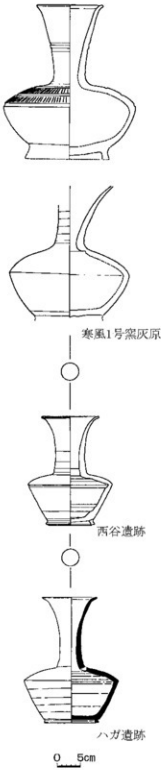


図160　長頸壺の変遷

注

（１）高畑知功(ほか)「津寺遺跡」５　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127　1998年

（2）草原孝典『古野口遺跡』岡山県教育委員会　1997年
（3）福田正継ほか『西谷遺跡－昭和５８年度圃場整備事業に伴う発掘調査－』長船町教育委員会　1985年
（4）山磨康平「寒風古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27　1978年
山本悦世『寒風古窯址群－須恵器から備前焼の誕生へ－』吉備人出版　2002年
（5）小笠原好彦「近畿地方の八・九世紀の土師器高杯とその流通」『濱三郎先生古稀記念論集弐道能道』1988年
（6）小森俊寛ほか「土器と陶磁器」『平安京提要』古代学協会・古代学研究所　1994年
（7）大矢義明ほか「内裏外郭跡」『平安宮跡発掘調査概要』　1983年
（8）堀内明博「平安京の土器・陶磁器」『古代学研究所研究報告第４輯平安京出土土器の研究』　1994年
（9）注８

参考文献

古代の土器研究会編『古代の土器１　都城の土器集成』真陽社　1992年

４　陶硯について

ハガ遺跡からは陶硯が11点出土している。羊形硯が１点、蹄脚硯が２点、圏足硯が５点、風字硯が１点、転用硯が２点である。県下における古代の陶硯に関する本格的な集成は、五島美術館の『日本の陶硯』(1)である。ついで、奈良国立文化財研究所からの『陶硯関係文献目録』(2)によって網羅的な集成がおこなわれた。それによると41遺跡で、遺跡の性格別では寺院12、官衙15、集落６、墳墓１、窯跡４、散布地６となっている。最近では松尾洋平氏により追加資料を含めた集成と、縁部形態や脚部形態の差をメルクマールとした分類がおこなわれ、備前国と備中国の旧国単位で地域差があることも指摘されている(3)。このことは両国にある窯跡からも円面硯が少なからず出土しており、円面硯の生産と消費が旧国単位内である程度完結するものであったことを示している。

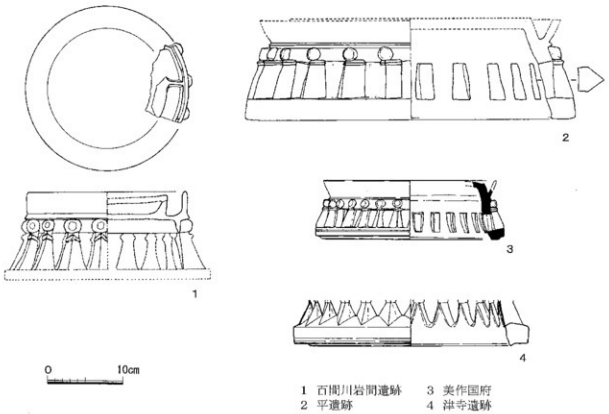
ハガ遺跡から11点もの陶硯が出土しているのは官衙遺跡と考えられることから当然といえるが、羊形硯と蹄脚硯が含まれるのは注目される。羊形硯はもちろんであるが、蹄脚硯の出土も県下において極めて稀だからである。まず、この点を確認してみたい。

（１）蹄脚硯（図161）

出土点数は２点であるが、焼成や色調が共通することから同一個体と考えられる。出土地点は内郭である。ただし、遺構に伴うものでないため２次的な移動の結果である可能性が高い。

古代の文房具を序列的に分類した成果によると(4)、蹄脚硯を伴う遺跡は最上位に位置づけられている。県下において約100点もの円面硯が出土しているものの、そのうち蹄脚硯は本例を入れても５点であることは象徴的である。まず、蹄脚硯を出土した遺跡を概観してみると、美作国では美作国府(5)と平遺跡(6)、備前国では百間川岩間遺跡(7)とハガ遺跡、備中国では津寺遺跡(8)である。

まず、美作国についてみると、美作国府からの出土は国府が地方官衙の最上位であることからも当然といえる。平遺跡は掘立柱建物と自然石を用いた礎石建物が検出されているが、それらは総じて小



1　百間川岩間遺跡　3　美作国府
2　平遺跡　4　津寺遺跡

図161　岡山県下出土の跨脚硯

規模である。また、鍛冶炉が多数伴っていることから工房的な性格が推測される。しかし、円面硯が14点、風字硯５点が出土しており、「郡」・「勝」・「嶋」などのヘラ書き土器や、「郡」・「印」・「夫」などの押印土器、「大」・「厨」などの墨書土器も出土している。そして、石帯や多量の瓦、約170点もの緑釉陶器片も出土している。遺物の構成からは並の遺跡とは考えられず、検出された建物の様相とのアンバランスは否めない。平遺跡の南側には勝間田遺跡があり、長大な掘立柱建物と築地遺構を検出している。これを勝田郡衙に比定し、平遺跡を郡衙に付属する工房とする考えがある(9)。しかし、平遺跡の報告書でも指摘されているように勝間田遺跡と平遺跡は、平遺跡の方が時期的に一部重複するものの、後出、あるいは後まで継続するようである。また、両遺跡から出土している瓦は白鳳期から奈良時代のもので時期的にも共通するが、勝間田遺跡の北に寺院跡を想定し、それに伴うものであることを想定する意見もある(10)。いずれにせよ、平遺跡の性格は工房的なものでよいと考えられるが、出土遺物は郡レベルのものとは思われず、時期的にも郡衙が衰退する平安時代まで盛行する点は、そのことを示唆しているようにも思われる。また、美作国は平城宮第２次朝集殿に用いられた瓦当文を正確に模した、いわゆる平城宮式系瓦の分布が、国府や国分寺などに限定される(11)。氏寺への使用は大海廃寺のみで認められるが、それは別型式の平城宮式系瓦を模している(12)。平遺跡と勝間田遺跡からは同種の平城宮式系の軒平瓦が出土しており、国府との関連がうかがえる。ただし、久米郡衙に比定される宮尾遺跡の西に隣接し、久米郡衙に付属する寺院跡と考えられている久米廃寺からも

平城宮式系軒平瓦が出土しており(13)、美作国の郡衙および、郡衙付属寺院へは平城宮式系の軒平瓦が分布するのかもしれない。これについては備前国の中枢部でも同じである(14)。かなり繁雑になったので整理すると、まず勝間田遺跡とそれに付属する寺院は宮尾遺跡と久米廃寺の関係のように郡衙と郡衙付属寺院と考えられるが、平遺跡は存続期間が平安時代まで含むことや、かなり特殊な遺物を多量に含むことから郡以上のレベルの工房も兼ねていた可能性も推測される。したがって、瓦脚硯の存在もそういった性格の反映と考えることができる可能性も示していると思われる。

備前国の百間川岩間遺跡は、「市」と墨書した土器が出土した百間川米田遺跡(15)に隣接している。百間川米田遺跡は奈良時代の倉庫群や「官」の逆字を押印した須恵器の杯、「上三宅」と墨書された土器も出土していることから、備前国府の港湾施設である国府津、あるいは国府市の可能性が推測されている(16)。岩間遺跡出土の瓦脚硯についてもそういった国府関連の官衙との関係で理解される。ハガ遺跡については、推定される備前国府域内であることや存続期間の長い官衙であることと、三彩陶器や羊形硯などの極めて特殊な遺物が出土していることから、備前国府の付属官衙であることはまず間違いなく、瓦脚硯の出土もそのことを示しているといえる。

今のところ、備中国で唯一の出土遺跡である津寺遺跡は、南北123.8m、東西94.0mの長方形区画溝があり、内部に掘立柱建物が整然と並んでいる。都宇郡衙、あるいは『風土記』逸文にある新造された国司館に比定する考えがある(17)。いずれにするかは遺跡の性格を墨書した土器や木簡などが出土していないため確定できないが、ただ備中国府の位置を推測することから、津寺遺跡の性格について若干考えてみたい。備中国府は加夜郡に存在するという『和名類聚抄』の記述や、現況の国府に関係する地名の分布から、総社市金井戸付近が推定されてきた。この地を中心に、総社市教育委員会により1985年から1988年にかけてかなり広範囲のトレンチ調査がおこなわれた(18)。しかし、国府に関する遺構はもとより、古代の時期の遺構や遺物も極めて少なかった。遺構や遺物が発掘調査で検出されなかったことが、本来的にもそこに存在しなかったことの証明にはなりえないものの、国府が存在していたとするにはあまりに少なすぎるといえる。そこでもう一度別の角度から検討してみると、まず国府の地名については、付近に中世の在地領主である国府氏がいたこととの関連も想定される。

「国府」地名が古代の国府まで遡らない可能性があるということである。また『和名類聚抄』については、記された郡名と

図162　備中南部平城宮式系軒瓦分布

は異なる郡に国府が存在する例もあることや、また、当初の国府が移転していたり、郡域そのものが変更されていたり、あるいは『和名類聚抄』そのものが誤記である場合など、様々な例があり、そのまま素直に受け取らなくてもよいように思われる[19]。そこで、地名や『和名類聚抄』とは別の視点から国府の位置を検討してみたい。備前の場合、備前国府推定地である旭川西岸平野を中心に平城宮式系軒瓦が分布している[20]。備中でも同様に平城宮式系軒瓦の分布をみてみると、現国府推定地よりも東の足守川中流域に分布の中心があり、そこに集中することがわかる（図162）。また、この地点は古代以来からの備中国屈指の遺跡密集地でもある。さらに時期は少し下るが、津寺遺跡に隣接する加茂政所遺跡[21]では平安時代中・後期の寺院跡が検出されている。出土した瓦は備中の古代寺院に広く分布し、一部平安宮で出土する瓦とも共通する。国府と極めて密接な関連のうかがえる寺院である。

以上のことから、津寺遺跡や加茂政所遺跡を中心とした足守川中流域において、古代の主要遺跡や平城宮式系瓦の分布の集中が認められる。それが古代の備中国における中枢地を示していると理解できるのならば、この地点にこそ備中国府の存在が推測されるのである。そうすると、細かな遺跡の性格を限定できる根拠はないものの、津寺遺跡も国府関連の施設であることが想定され、蹈脚硯の出土もそのことを示している可能性があるといえる。

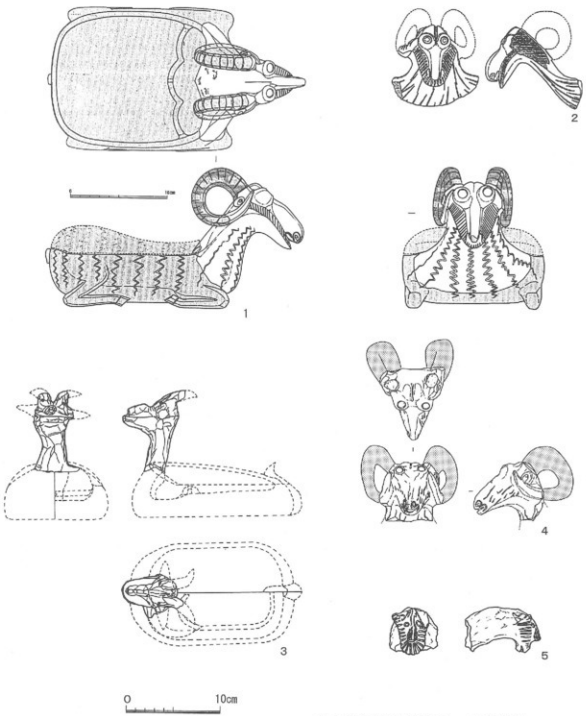
以上のように、蹈脚硯が出土する遺跡は備前国で２点、備中国で１点、美作国で２点と極めて少数である。しかも出土した遺跡の性格をみると、官衙のみ、あるいは官衙関連遺跡で出土しており、国府関連が確実なものは３点、あとの２点も郡衙レベルは確実で、国府関連遺跡である可能性もあるものでもある。つまり蹈脚硯は地方官衙の最高レベル、あるいはそれに準ずる遺跡で出土するといえそうである。これはハガ遺跡の性格をも示唆している。

（２）羊形硯（図163）

現在までのところ、ハガ遺跡出土の羊形硯は県下で唯一の例である。全国的にみても本例をいれて８例のみである。いずれも奈良時代から平安時代前期の時期である可能性が高い。羊形硯は平城京左京四条四坊出土[22]のものが典型とされる。それは頭～胸部の破片であるが、平城京左京八条三坊出土の胸部～前脚部破片や、隋唐時代の明器にみられる羊の造形を参考に全形が復原されている。ハガ遺跡出土の羊形硯は表面がかなり剥離しているため細部の比較は難しいが、それと比較すると、逆三角形の頭部、竹管による眼球、頭部から眼球の間がＹ字形にくぼむといった特徴は共通しており、極めて類似したものといえる。

その他の羊形硯とされるものと比較してみると、愛知県三河国府跡（白鳥遺跡）[23]、三重県斎宮跡[24]、から出土したものとは共通点が多い。京都府樋ノ口遺跡出土[25]のものは龍形の硯として復原されているが、羊形である可能性が高く、先端が尖ったように復原されている角は羊の弧状の角であると考えられる。そうするとこれも平城京出土の羊形硯とかなり近いものといえる。岐阜県尾崎遺跡[26]出土のものは、以上の羊形硯と比較するとかなり抽象化された表現となっており、また首の角度からしても平城京出土例と同じ様な硯部が付属するとは思われない。例えば土牛のような土製品になる可能性も考慮されるもので、羊形硯であったとしても、かなりデフォルメされて模倣されたものの可能性が高い。

三河国府跡はいわゆる地方における最上級の官衙であり、斎宮は宮都に準ずる。樋ノ口遺跡は遺跡



1　平城京左京四条四坊　　4　斎宮跡
2　三河国府跡　　5　尾崎遺跡
3　樋ノ口遺跡

図163　羊形硯集成

の性格は確定していないが、8世紀中葉に瓦を伴う築地があり、二彩・三彩陶器が多く出土している。瓦は平城宮所用瓦であり、離宮である可能性が高いと指摘されている[23]。

つまり、平城京で出土している羊形硯と同じ意匠、あるいは同系品といえるものを出土する遺跡は

全国的にも数が限られており、さらに、出土する遺跡も官衙、地方では最上位の官衙である国府、中央では宮都や離宮などに伴うといえそうである。備前国府の関連官衙であると考えられるハガ遺跡から羊形硯が出土したことは、そのことと矛盾がないといえよう。ただし鎌脚硯のように、その存在自体が中央と地方、あるいは地方のなかの官衙の序列を規定するものであったとは考えられない。それは平城京においても出土量が少なく、かつ宮内に集中するといった傾向が認められないことに示されているように思われる。羊形硯が出土した平城京左京四条四坊が、『古事記』や『日本書紀』の撰者として著名である太安萬侶の墓誌の銘にある「左京四條四坊従四位下勲五等太朝臣安萬侶、癸亥年七月六日を以て卒す　養老七年十二月一五日乙巳」と記された安萬侶の籍と一致することは、ある意味で示唆的である。羊形硯が出土した地点が安萬侶の墓誌銘に記された地であるのか不明であり、また記された地点であったとしても実際に安萬侶が居住していたかどうかも不明なのであるが、安萬侶自身、あるいは安萬侶のような貴族の所持品であったと考えることができるのならば、貴族のなかでも教養人といえる人々が、その許された許容範囲のなかの嗜好品として羊頭硯を用いたのではないかという推測が想定されるのである。つまり、羊頭硯を用いることができるのは、一定以上の階層であること、さらに用いることを好む教養人であったことといった、当時としてはかなり難度の高い条件が重なっていたのではないかと推測されるのである。そのため、現況のような出土量が稀少で、出土遺跡も限定されているのではなかろうか。

注

（1）伊藤　晃「岡山県出土の陶硯」『日本の陶硯』五島美術館　1978年
（2）奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター『埋蔵文化財ニュース』41　1983年
（3）松尾洋平「備前・備中の古代陶硯－円面硯を中心に－」『古事　天理大学考古学研究室紀要　第６冊』2002年
（4）佐藤浩司「墨書土器・ヘラ書き土器と硯に関する一考察」『古文化談叢』30　1993年
（5）岡田　博「官衙」『吉備の考古学的研究』（下）　山陽新聞社　1992年
（6）井上　弘ほか「平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』８　1975年
（7）井上　弘ほか「百間川岩間遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46　1981年
（8）高畑知功ほか「津寺遺跡５」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127　1998年
　亀山行雄ほか「津寺遺跡４」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116　1997年
（9）河本　清「美作の官衙」『吉備の考古学』福武書店　1987年
　注５
（10）山中敏史「遺跡からみた郡衙の構造」『日本古代の都城と国家』塙書房　1984年
（11）出宮徳尚「古代寺院址」『岡山県の考古学』吉川弘文館　1987年
（12）注11
（13）栗野克己「久米廃寺（補遺編）」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』24　1978年
（14）草原孝典『新道遺跡』岡山市教育委員会　2002年
（15）物部茂樹ほか「百間川米田遺跡」４　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』164　2002年
（16）注５
（17）注５

葛原克人「吉備の津」『古代の『海の道』－古代瀬戸内海の国際交流－』学生社　1996年
(18) 村上幸雄ほか「備中国府跡　緊急確認調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』7　1989年
(19) 木下　良「古辞書類に見る国府所在郡について」『国立歴史民族博物館研究報告』第10集　1986年
(20) 注14
(21) 松本和男ほか「加茂政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138　1999年
(22) 奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊一三・一四坪発掘調査報告』1983年
(23) 豊川市教育委員会「白鳥遺跡（三河国府跡）００Ｄ地点発掘調査の概要」『発掘だより』No.34　2000年
(24) 斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡　平成３年度発掘調査概報』1992年
(25) 伊野近富「樋ノ口遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第48冊
(26) 財団法人岐阜県文化財保護センター「尾崎遺跡」『岐阜県文化財保護センター調査報告書』第18集　1994年
(27) 注24
樋ノ口遺跡については寺院であることを指摘する意見もあるが、寺院の存在を示す文献はあるものの、その寺院が奈良時代まで遡ることを示す直接的な文献はなく、また、発掘調査の知見が、想定される寺院の動向と合致しないことから、伊野氏の意見の方が妥当と考えられる。
足利健亮「樋ノ口遺跡を山田寺跡にあてる考証」『京都府埋蔵文化財情報』第42号　1991年

5　瓦塔・泥塔について

瓦塔と考えられる破片と泥塔が内郭を中心に出土している。瓦塔についてはⅠ期の内郭溝からも出土しており、該期には伴っていたと考えられる。泥塔についてはⅢ期の内郭溝から小片が出土していることや、それ以前の遺構からは出土していないことから、Ⅲ期（11世紀～12世紀）の時期と考えられる。しかし、瓦塔・泥塔ともその出土の大半は包含層からであり、下限の時期などについては出土状況からはよくわからない。また形態や焼成にもいくつかのバラエティに富み、それが同時期のなかの個体差なのか、それとも時期差なのかは明確にしがたい。ただ、瓦塔については最近亀田修一氏の論考(1)があり、そのなかで当遺跡出土の瓦塔についても紹介されている。ここでは亀田氏の論考に従いながら、ハガ遺跡出土の瓦塔について若干の整理をおこないたい。また泥塔については県下での発掘調査での出土例はハガ遺跡のほかには１点だけであるが、以前出土していたものも追加して県下の様相を若干整理してみたい。

（1）瓦塔（図89、90）

瓦塔とは粘土を材料とした仏堂で、なかでも木造高層塔婆をかなり細部まで忠実に模したものを典

型とする(2)。東日本からの出土数が圧倒的に多い。また出土する遺跡の性格においても東日本と西日本には違いがあるようで、西日本では圧倒的に寺院や寺院関連遺跡からの出土が多い。一方、東日本では集落からも出土し、集落内の小規模な仏堂などに安置されたことが想定される例もある。いわゆる村落内寺院(3)と呼ばれるものであるが、東日本では明確な例が比較的多数あるが、西日本ではほとんどなく、瓦塔の出土量の差と比例するようでもあり、寺院的性格の遺跡のありようも東日本と西日本には差があることも推測させられる。また西日本からは、木造高層塔婆を模した平面形が方形のものがある一方で、軸部が円筒形で屋根の平面形が円形や多角形のものも多いことが指摘されており、特に現況の集成では岡山県と兵庫県から出土する量が多く、古代における地域的特質の１つと指摘する考え(4)もある。

しかし、西日本で出土する瓦塔は断片的なものが大半で、不確定要素が多い。ハガ遺跡出土の瓦塔についても同様で、断片的な破片ばかりで、長さが20㎝近い大きな破片があるにもかかわらず、全形を推知することはできない。しかしながら、建物の組物や柱、窓を表現した破片や、丸瓦を表現した屋根部分の破片もあることから瓦塔の破片であると推測される。

それでは、ハガ遺跡出土の瓦塔について具体的に見てみたい。胎土や焼成をメルクマールとすると、硬質で灰褐色の色調であるもの（Ⅰ類）、やや軟質で灰白色の色調のもの（Ⅱ類）、瓦質のもの（Ⅲ類）の３群に分けられる。Ⅰ類は（Ｔ１～Ｔ８）で、Ⅱ類は（Ｔ12～Ｔ36）で、Ⅲ類は（Ｔ９～Ｔ11）である。一応、胎土や焼成が似ているものを同じ瓦塔の部品であると仮定し、比較してみたい。ただし、いずれの瓦塔についても塔部と考えられる部品の横断面は円弧状であり、平面形が方形の層塔というよりも、軸部が円筒形であったようである。しかも、窓

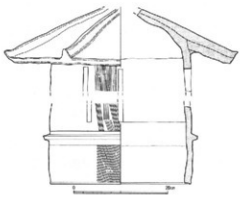


図164　千本屋廃寺出土瓦塔

図165　Ⅰ類とⅡ類の屋根の変遷

おそらく連子窓を模したと考えられる方形の透かしがめぐっている。このような形態の瓦塔は、兵庫県千本屋廃寺出土の瓦塔(5)が比較的全形のわかる資料である（図164）。

屋根の部分はⅠ類とⅡ類で認められる。Ⅰ類の屋根は平面形が円形であり、Ⅱ類は多角形である。両類とも平瓦の表現はおこなわれていないが、丸瓦についてはⅠ類が断面円形の突帯で、しかも刻目によって丸瓦を一枚ずつ表現している。一方、Ⅱ類は断面が方形となり刻目も認められない。Ⅱ類の方が抽象化した表現になっているといえる。瓦などの表現が省略化、あるいは簡略化される方が時期的に下がることが指摘されている(6)。そうすると、Ⅰ類の方がⅡ類よりも古い可能性が高いということになる。さらに軸部と屋根の接合についてみると、Ⅱ類は（T12）からすると、屋根と軸部は一体につくられており、千本屋廃寺の瓦塔と共通する。Ⅰ類の（T１）をみると、柱とその上部にのった組物が表現されており、その上面は平坦に仕上げている。この部品が最上層になるかどうかは明確でないが、別造りの屋根の部分がのることは間違いない。つまり、Ⅰ類は軸部と屋根が別々につくられているのである。Ⅱ類よりⅠ類の方が古いとすると、当初は屋根と軸部は別々につくられていたものから、連続してつくられたものに変化したということも推測される（図165）。

透かしの間隔については、Ⅰ類とⅡ類は2.7～3.0cmで、それ程差はない。Ⅲ類については透かしがわかる資料が１点だけであり、しかも２つ揃っていないため間隔はわからない。ただ、その１点には柱が付属しており、透かしとの間隔は3.0cmである。同様の部品のⅠ類の破片を見てみると、柱と透かしの間隔は1.0cmである。Ⅲ類は透かしの間隔がⅠ・Ⅱ類と比べて広かった可能性が高い。また、蓮華を模したと推測される線刻がⅢ類の壁部にはめぐっている。器物における蓮華文の線刻は、倉敷市西岡廃寺出土の平安時代後期、もしくは中期の平瓶(7)の上面でも認められる。緑釉陶器に花文の線刻、いわゆる陰刻花文が盛んに施されるのも９世紀からであり(8)、瓦塔にも該期以降に取り入れられたことも想定され、透かしの間隔とともに、Ⅲ類が後出的であることを示す根拠になるかもしれない。

屋根の構造、透かしの関係、線刻といった断片的な視点からの極めて大雑把な比較であるが、ハガ遺跡で出土した瓦塔はⅠ類→Ⅱ類→Ⅲ類といった変遷が推定される。つまり、ハガ遺跡の瓦塔は同時に複数あったというよりも、順次つくり替えられた可能性が高いといえる。

このほか、Ⅰ類の瓦塔であるが、相輪と考えられる部品もある。また、Ⅰ類→Ⅱ類の変化が正しいとすると、円筒形の軸部の瓦塔の屋根の平面形は、円形から多角形へ変化したということにもなる。最も全形の推測が可能なⅠ類の瓦塔を千本屋廃寺の瓦塔をモデルに、かなり大胆に復元すると、図166のようになる。千本屋廃寺の瓦塔と比べると柱の表現などがあり、さらに透かしの数も多いということがいえる。透かしを連子窓を表現していると推測すると、よりⅠ類の方が連子窓に近い表現となっている。柱の表現とも合わせると、千本屋廃寺出土の

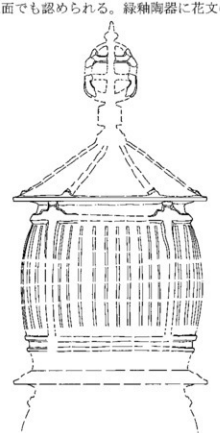
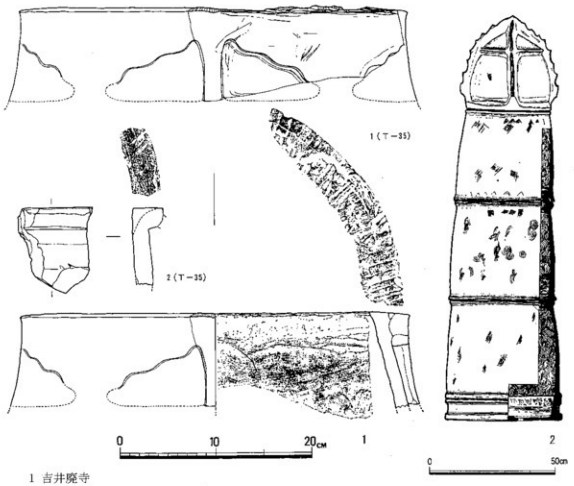


図166　Ⅰ類の瓦塔推定復元



1 吉井廃寺
2 熊山遺跡

図167　瓦塔類似土製品

瓦塔よりもⅠ類の瓦塔の方が、建築物としての塔を写実的に表現しており、時期的に遡る可能性があるように思われる。ただしⅢ類の瓦塔について、柱と推測される部分には抉りがあり（T10）、この表現は熊山町熊山遺跡の石積遺構から出土した筒形容器[9]の先端部と似ている（図167）。また、この部分には（T11）と同様に十文字に凸帯を貼付しており、共通の表現といえる。ハガ遺跡出土の瓦塔と考えられる土製品のなかには、瓦塔以外の土製品が含まれている可能性があるといえる。瓦塔以外の土製品で可能性のあるものとして台座がある（図167）。瀬戸町吉岡廃寺出土[10]のもので、直径約40cmの円形で、側面が台形を呈する。周囲には格狭間のような文様がめぐる。ただし、吉岡廃寺出土の台座とされる土製品自体が、円筒形の瓦塔の一部である可能性もあるように思われる。

以上のようにハガ遺跡の瓦塔は、円形と多角形の屋根があることから、最低2個体が存在していたと考えられる。ただし前者の丸瓦部には、丸瓦一枚一枚ごとの表現を表している刻み目があり、断面形も丸瓦同様に円形であるが、後者については刻み目も省略されており、上端部も方形にするなど丸瓦部としての意識が稀薄となっている。この点を時期差と考えることができるのならば、ハガ遺跡においては建物が破損や老朽化して建て替えられるのと同様に、瓦塔も作り替えられた可能性があるといえよう。

また、瓦塔以外の土製品が含まれている可能性も推測される。ただし、頽するいずれの土製品も寺

院あるいは寺院的な遺跡からの出土例であり、仏教的な場で用いられた土製品であるといえる。

ともあれ、ハガ遺跡出土の瓦塔は、断片的なものばかりであり、より全形の明確にわかる遺物の出土をまってさらに比較、検討していきたいと思う。

（2）泥塔

泥塔とは粘土を用いてつくった小型の塔で、木型を用いた型づくりのものと、手ずくねで整形されたものとがある。建物をかなり忠実に模し、大きさも大きく、多数の部品からなる瓦塔と比べると極めて簡素な点が特徴といえる。寺院関係の遺跡から出土する場合が多く、瓦経の出土地点と重複する地点で出土する傾向があることを指摘する考え(111)もある。また、京都の六波羅蜜寺本堂の基壇から約8000基が出土した(112)ことに代表されるように、1ヶ所から多数集中して出土する場合もある。泥塔に関する文献は比較的多い。初見は『小右記』における永延二年（988）の慈徳寺において8400泥塔を供養したという記事で、以降平安時代末から鎌倉時代にかけて泥塔を用いた供養の記事が多数認められる(113)。

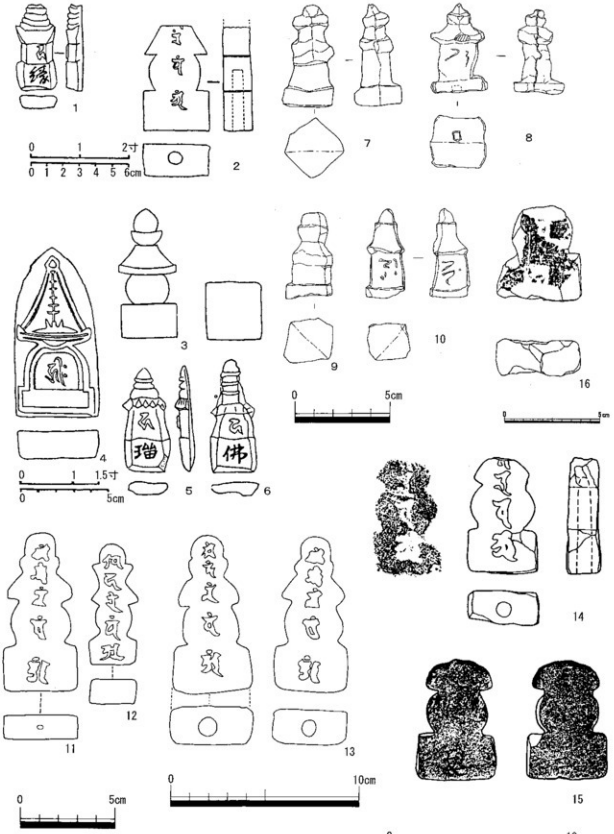
泥塔に関する研究は古くからあるが、体系的な研究は石田茂作氏によっておこなわれた(114)。氏は日本出土以外に朝鮮半島や中国大陸出土の泥塔も集成分類し、日本出土のものについてはⅠ～Ⅵの6種類に分け、愛知県北野廃寺出土の段を重ねた円錐形のものを奈良時代、それ以外の多宝塔型（この形態に関しての名称はない）、円塔型、宝篋印塔型、五輪塔型、宝塔型、を平安時代から鎌倉時代とした。その後、肥後和男氏(115)や日野一郎氏(116)により泥塔に関する集成や整理がなされたが、石村喜英氏は文献や最新の例の集成をおこない、総合的な泥塔に関する考察をおこなっている(117)。石村氏は泥塔を円塔形泥塔、段塔形泥塔、五輪塔形泥塔、宝塔形泥塔、宝篋印塔形泥塔、層塔形泥塔、相輪樘形泥塔の7種に分け、そのうち五輪塔形、宝塔形、宝篋印塔形には断面形が方形となるものと扁平になるものがあり、層塔形には同じく断面形が方形となるものと円形になるものがあるとした。時期については一部に奈良時代に遡る可能性もあるが、大半は平安時代中期以降で、扁平形のものは鎌倉時代から室町時代とした。扁平形については、最近、畑大介氏によって詳細な分類が行われている(118)。

岡山県内での泥塔出土地点は、ハガ遺跡例を含めても8地点である。そのうち実見できたもの及び、図が認められるものは6地点である。それらを石村氏の分類を参考にしながら概観したい。特に断面形が扁平となるものが時期が下るという指摘を用いて、まず断面形が方形のものをⅠ類、扁平なものをⅡ類とする。Ⅰ類は、中央に型の合わせ目が明瞭であり、粘土塊を2つの型で挟み込んで整形している。Ⅱ類は、板状の粘土に片方から型を押しつけて整形しており、型とは反対側については、調整をおこなっていないものが多いが、若干ナデているものもある。つまり、Ⅰ類は2つの型を用いた型づくりで、Ⅱ類は1つの型を用いた型づくりであり、よりⅡ類の方が手法的に簡素化しているものといえる。

1．県内出土の泥塔

Ⅰ類（図168）

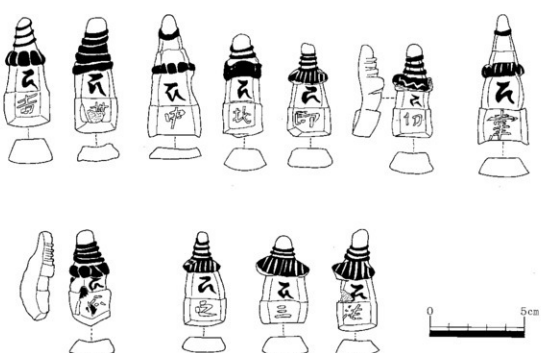
ハガ遺跡、岡山市湯迫最明寺(119)、同浄土寺(120)出土のものである。いずれも備前国府推定地付近からの出土であり、浄土寺は東大寺再建をなした重源との関係も伝わっている。重源は南都復興に際し、備前国を東大寺造営料所として与えられており、立場的には備前国司といえる。これらの泥塔の分布は、備前国府との関係を想定することが可能と思われる。ハガ遺跡出土例は宝塔形と円塔形の2種あるが、円塔形には五輪塔が



1 鳥取県船上山麓　　7～10 岡山市浄土寺　　14～15 矢部大坏遺跡
2 鳥取県八幡宮　　11 城崎郡温泉寺　　16 左古谷遺跡
3 岡山市最明寺　　12 法光寺
4～6 鳥取県船上山麓　　13 岡山市清水前谷

図168　泥塔集成(1)

1　仏教寺



2　鳥取県東伯郡以西村宇竹内（注20を再トレース）

図169　泥塔集成（2）

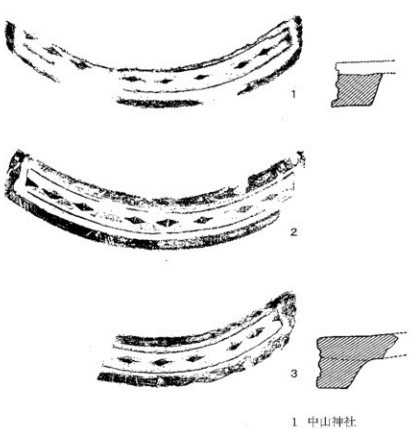
図170　豊楽寺出土泥塔(注20を再トレース)

8個円弧状に並べられていることからも、形状は円塔形でも意識としては五輪塔形であったといえる。ただし、石田茂作氏が集成した中国大陸出土のものとかなり似ていることも指摘できる。最明寺出土とされるものは長さが7cmほどの五輪塔形である。浄土寺出土とされるものは4個体ある。いずれも全長が4.5～5.5cmの小型のものばかりである。胎土も似ている。基本的には五輪塔形であるが、塔身が方形に近いことから、一見多宝塔形にも見える。受花や笠石の形態がそれぞれ異なっており、4個体とも別の型でつくられたものといえる。型の合わせ目についても、底辺に平行しているものと、底辺の対角線にあるものと2種があり、また、塔身に梵字のあるものとないものがある。1点であるが、底部裏面に焼成前の小孔があけられたものがある。ハガ遺跡出土の

泥塔にも同様の例がある。これは木製小塔のように分骨器として用いられたことを推測させられる。

Ⅱ類（図168、169、170）

建部町豊楽寺(21)、久米南町仏教寺(22)、岡山市矢部大块遺跡(23)出土のものである。このほか児島郡宮津村高島神社（岡山市宮浦高嶋神社）(24)、灘崎町佐古谷遺跡(25)、総社市秦原廃寺(26)からも出土があったとされる。豊楽寺のものは本堂裏山の石塔の下から出土したと伝えられ、千数百点も採集されたとされる。泥塔の他に鋳製懸仏片、土師器甕片、土器や木片、鉄釘などが出土しており、泥塔や懸仏を瓶に入れ、さらに木箱に入れたと推測されている。泥塔は土師質の焼成で、厚さ0.5～1.0cmの板状の粘土に型を押しつけて整形している。形態は五輪塔形と宝塔形の２種類に分けられるが、文様や梵字などの施し方が異なるものもあり、かなり多くの型が存在していたことがうかがわれる。仏教寺でも同様の泥塔が多数（50点以上）出土しており（図169）、なかに個別の部品を別々に焼成したと推測される五輪塔の一部も認められた。組み合わせ式の五輪塔は京都六波羅蜜寺からも出土しているが、それと比較すると断面形も扁平であり、各部品をつなぐための円孔などは認められない。岡山市矢部大块遺跡の泥塔は、丘陵部の露岩裾部の平坦面から土師質土器椀、皿とともに出土した。それらは灰色粘土で覆う床面状から出土しており共伴すると考えてよい。おそらく、土壙墓もしくは箱形の木棺墓で、泥塔はそれに伴う副葬品と考えられる。いずれにせよ、この泥塔は土器の年代である13世紀中葉の時期であり、同形態の泥塔の時期を示す重要な資料といえる。出土した２点とも五輪塔形で梵字が認められ、下部からの円孔が施されたものもある。この泥塔と全く同じ形態のものが佐古谷遺跡、岡山市清水前谷遺跡(27)、鳥取県船上山麓(28)と兵庫県城崎郡温泉寺(29)から出土している。



1　中山神社
2　清水廃寺
3　仏教寺

図171　菱形文軒平瓦

2．時期と性格

極めて少ない事例といえるが、県内の泥塔は、Ⅰ類は備前、Ⅱ類は美作と備中に集中する傾向がある。Ⅰ類とⅡ類の差を石田氏の指摘のとおり時期差と考えてよいとすると、現況の資料では、まず備前に泥塔が分布するようになり、ついで美作や備中で分布するようになったといえる。備前におけるⅠ類の分布は国府推定地に集中、かつ限定されることから備前国府と密接な関係にあったことは容易に推測され、備前国府関連の寺院的官衙と推測しているハガ遺跡から出土したことも、そのことを示唆している。

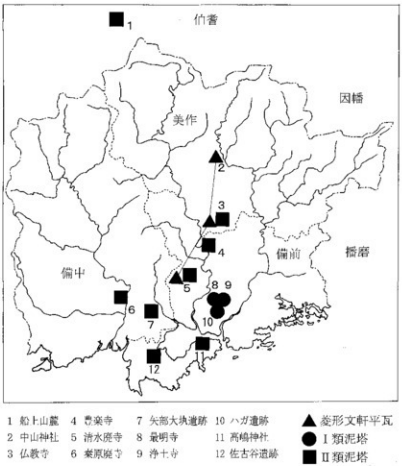


図172　泥塔・軒平瓦分布

地方における泥塔供養の受容が、国府によっておこなわれていたことを示す具体的な事例といえる。

一方、Ⅱ類については分布がより拡散的であり、集中点的な分布を示すⅠ類とは異なっている。Ⅱ類の泥塔を出土した仏教寺からは、瓦当面に菱形が連続する中世前半の軒平瓦（図171）が採集されている。同じ文様の瓦が美作一宮の中山神社、岡山市清水廃寺でも出土している。このことから、中世前半に中山神社－仏教寺－清水廃寺を結ぶ山間部のルートが、旭川に沿って南下する古代以来の道とは別に、県北部と県南部を結ぶ道となった可能性が推測されている[30]。このルート上には泥塔を出土した豊楽寺や清水廃寺背後の中世墓地である清水前谷遺跡もある。さらにⅡ類の泥塔は、鳥取県船上山麓出土品[31]、同県東伯郡以西村出土品[32]ともよく似ている。また、矢部大坎遺跡出土の泥塔についても、岡山市清水前谷遺跡出土品、灘崎町佐古谷遺跡出土品、鳥取県八幡宮境内出土品、兵庫県城崎郡温泉寺と極めてよく似ている。中山神社－仏教寺・豊楽寺－清水廃寺（清水前谷遺跡）のルートから、清水廃寺を過ぎて若干西へ曲がるルートをとると矢部大坎遺跡の立地する足守川流域へは容易にでることができる。つまりⅡ類は日本海側から県南部を結ぶルート上に分布している可能性が推測されるのである（図172）。また矢部大坎遺跡のⅡ類の泥塔が13世紀中葉であることから、この様相は13世紀前後の中世における状況と推測され、そのルートに中世の同文瓦が分布することは、おそ

らく同じ理由からであろう。

中世になると、遺跡の分布が稀薄、もしくは全く見られなかった山間部にも認められるようになる。それは山間部にも活発な開発がおこなわれるようになったことを示している。山間部の開発は、山々に囲まれた小平野や谷状地形などが対象であることから、平野部のような一面的な開発はおこなえないものの、一方で自己完結的で自立的な開発がおこなえる。そのため中世の山間部には新たな農村や在地領主が出現した。山間部を通る中世の交通路とは、そのような細かな開発単位によって分立した農村や在地領主の拠点を結ぶものでもあった。したがって、Ⅱ類の泥塔や中世の軒瓦の分布は、山間部の開発によって自立し、台頭してきた人々が受容した結果と考えられる。そして、その分布が、交通路に沿って広く分布していることは、その受容が何かに規制されていたというのではなく、自立的におこなわれていたということであり、交通路そのものが自立した農村によって維持されていたことも示している。Ⅱ類の泥塔の分布は中世の交通路が古代の交通路と本質的に異なる点を具体的に示しているともいえる。

3．小結

極めて少ない事例であり、しかも大半が採集資料であるため、時期や共伴関係が明確でないものが多く、その詳細についてはより良好な類例が増加した段階で検討する必要がある。しかし、現況で断面形をメルクマールとすると、県下の泥塔は２つの型を合わせて成形する断面形が方形もしくは円形の泥塔と、１つの型を粘土板に押しつけて成形する断面形が扁平の泥塔の２種に分類され、それぞれ時期差や分布の背景が異なることがおぼろげながら見えてきた。断面形が方形もしくは円形のものは備前国府を中心として分布しており、いわば古代的な世界の泥塔といえる。扁平のものは山間部を通る交通路に沿って分布しており、いわば中世的世界の泥塔といえる。まさにハガ遺跡山土の泥塔は、ハガ遺跡の性格を示す遺物といえるのである。

注

（1）亀田修一「吉備の瓦塔」『瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』古代吉備研究会　2002年

（2）石村善英「瓦塔」『新版考古学講座第３巻　塔・塔婆』雄山閣出版株式会社　1976年

（3）須田　勉「平安時代初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢Ⅱ』1985年

（4）注１

（5）高井悌三郎ほか『播磨千本扇廃寺跡』兵庫県宍粟郡山崎町教育委員会　1982年

（6）池田敏宏「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討－関東地方瓦塔屋蓋部編年の検証作業を中心に－」『研究紀要』７　（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1999年

（7）間壁忠彦・間壁葭子「仏教遺跡」『新修倉敷市史』第１巻考古　1996年

（8）浅田員由「陰刻花文陶器の問題点」『文様陶器の流れ』三好町立歴史民俗資料館　1988年
井上喜久男「奈良・平安時代の絵画文様」『日本陶磁絵巻－焼き物に施された絵画』愛知県陶磁資料館・五島美術館　1988年

（9）坪井清足ほか『熊山遺跡』熊山町教育委員会　1974年

（10）柳瀬昭彦「吉岡廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』49　1982年

（11）石田茂作「土塔に就いて」『考古學雑誌』17－６　1927年

(12) 柴田　実ほか『六波羅蜜寺民族資料緊急調査報告書（第一分冊）』元興寺仏教民族資料研究所　1971年
(13) 石村善英「泥塔」『新版考古学講座第８巻特論（上）』雄山閣出版株式会社　1971年
(14) 注11
(15) 肥後和男「日本発見の泥塔について」『考古学』９－４　1938年
(16) 日野一郎「我が国に於ける小塔供養の推移」『史観』1938年
(17) 注13
(18) 畑　大介「扁平形泥塔について」『山梨考古学論集』Ⅱ　1989年
(19) 注13
(20) 浄土寺住職のご厚意により実見・実測させて頂いた。氏の御教示によると、泥塔の出土地点は現浄土寺よりも若干東の地点といわれていたとのことである。
(21) 水原岩太郎『豊楽寺印仏之図』1936年
(22) 注21でも紹介されているが、仏教寺住職のご厚意によりいくつかを実測させていただいた。
(23) 内藤善史ほか「矢部大坎遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82　1993年
(24) 石田茂作「泥塔」『仏教考古學論攷四　仏塔編』思文閣出版　1977年
(25) 田嶋正憲「佐古谷遺跡」『藤崎町埋蔵文化財発掘調査報告』1　2001年
(26) 注24
(27) 中川満雄・河本一夫『清水前谷史蹟調査報告』1935年
(28) 注13
(29) 注21
(30) 行田裕美ほか「美作一宮中山神社の出土遺物をめぐって－特に軒平瓦を中心に－」『古代吉備』第15集　1993年
(31) 注13
(32) 注20

6　備前国府との関係

（1）備前国府の所在についての研究史

備前国府に関する研究史は伊藤晃氏により極めて丁寧にまとめられており(1)、ここでは大雑把な概要だけを触れておく。国府の所在について記された最も古い文献は『和名類聚抄』で、元和三年（1617）に那波道圓が刊行し版を重ねた、いわゆる流布本をもとに国府の所在地が推測されてきた。備前国の場合は御野郡となっていた。御野郡域の主体は旭川西岸の平野部である。しかし、旭川西岸平野には古代寺院や国府の所在を示すような有力な遺跡が見当たらない。一方、上道郡域である旭川東岸平野には古代寺院が集中しており、しかも国府跡を示す地名も存在する。このことから国府は上道郡に存在し、御野郡にあるという『和名類聚抄』は誤記であったとする見方と、御野郡と上道郡の郡境である旭川が流路を移動したため郡境が移動し、そのため現在の上道郡の一部はかつては三野郡であったという見方があった。しかし郡境の移動説は、後神三千代氏がおこなった空中写真と大縮尺の

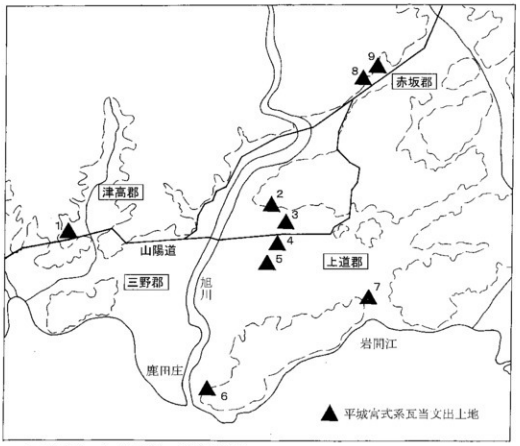
地図による微地形解析により、旭川の本流が移動したことが否定され、さらに後神氏は三野郡域と上道郡域の条里地割にズレが認められることからも、郡境の移動はなく、『和名類聚抄』の誤記であるとした(2)。伊藤晃氏も旧河道を復元し、旭川の本流であったとされる旧河道が、上道郡内の上道郷や幡多郷を想定される三野郡域内に取り込んでしまうことなどから、郡境の移動はなかったと考えた。しかし、後神氏とは異なり『和名類聚抄』のとおり、国府の位置を旭川西岸の三野郡域に想定した(3)。そのほか、上道郡と御野郡の間を国府が移転していたという見方も出された。しかし、伊藤氏の指摘のとおり、この説には論拠が明確でないといえる。ところで、備前国府が三野郡にあるとした流布本の『和名類聚抄』のほかに、大東急記念文庫本の『和名類聚抄』では上道郡にも国府が所在していたことが記されていることが明らかとなり(4)、現況の遺跡や地名の分布と文献が矛盾なく結びつくこととなった。ただし、大東急記念文庫本の『和名類聚抄』の三野郡の項にも国府の存在が記されており、流布本の単なる誤記というわけでもなさそうである。この点については後で検討してみたい。

備前国府が旭川東岸平野にあるという説のうちでは、現在県指定史跡となっている「国長宮」が国府の正庁であるとする意見と、それを否定し、より東に求める意見がある。「国長宮」を国府に比定する意見は古くからあるが、高橋護氏は「国長宮」周辺には、「国長」、「長森」、「新九郎屋敷」などの中世の負名制に関する地名が散見されることから、国長宮は国庁のことではなく、より新しい地名であるとした。そして「国長宮」の東側にある旧流路を人口の運河の痕跡とし、これより東に国府域を想定した(5)。出宮徳尚氏も高橋護氏の想定国府域と近い意見を示したが、その根拠の１つに国府市場に所在する成光廃寺から出土した軒丸瓦に注目した。この瓦は、地方では稀な塼上積基壇を用いた賞田廃寺が最も興隆した時期の瓦であり、この寺の興隆と中央政界で活躍した上道朝臣氏婺太都の動向が一致すると指摘している。上道朝臣氏は奈良時代に備前国司にもなっており、成光廃寺が古代寺院でなければ国衙である可能性を推測している(6)。このほか、現況の地割りを歴史地理学的視点から分析し、国府域を国府市場東半に推定する意見もいくつかある。

（2）川原寺式・平城宮式系瓦当文（備前国府系軒瓦）からみた備前国府の位置

備前国府の所在地については大方の意見として旭川下流域の平野に想定されているが、旭川西岸平野（三野郡）、および東岸平野（上道郡）のいずれかに求めることについては意見が分かれている。『和名類聚抄』を根拠にすると、その解釈によって両岸どちらへも想定することが可能で、地名や古代寺院の存在状況からは、旭川東岸平野の方への想定が有力である。まず、備前国府が旭川両岸平野のどちらの平野へ想定することが妥当であるかという点を検討してみたい。

検討する視点として、平城宮式系の文様をもつ軒瓦の分布からみてみたい。古代における軒瓦の文様の分布に、中央と地方や在地首長間の政治的関係が反映されているという指摘は多くあり、旭川東岸平野にある古代寺院についても相互に同文瓦が分布することを根拠に、在地有力豪族である上道氏一族の氏寺という理解がなされている(7)。平城宮第２次大極殿や朝集殿で用いられている軒瓦、いわゆる平城宮式系瓦当文と類似した文様の瓦の分布については、郡司層の律令体制への組み込みなどの中央政府の政治的動向を反映させていると考えられており(8)、和銅六年（713）に備前国の６郡を



1 高原遺跡　4 ハガ遺跡　7 米田遺跡
2 賞田廃寺　5 幡多廃寺　8 馬屋遺跡
3 成光廃寺　6 網ノ浜廃寺　9 備前国分寺

図173　平城宮式系軒瓦分布

割いて分国された美作国では、同種の瓦が氏寺には分布せず官衙や国分寺・国分尼寺のみにしか分布していないのは、そのことを先鋭的に示している。したがって、平城宮式系瓦当文の分布は中央対地方の関係、おそらく国府を介在して地方支配をおこなっている以上、地方においては国府との関係を示している可能性が高いと考えられる。この点を考慮して、旭川流域における平城宮式系瓦当文の分布をみていきたい。

ここで、平城宮式系瓦当文とするのは、平城宮六二二五型式の軒丸瓦と、同六六六三型式の軒平瓦の文様を忠実に模したものであるが、同種の軒平瓦の文様が陰刻であるものも含む。それは、陰刻のものは高原遺跡(9)や、網ノ浜廃寺(10)、ハガ遺跡で、平城宮六二二五型式系の軒丸瓦とともに出土しており、文様的にも陰陽が逆なこと以外は忠実だからである。ただし、陰陽逆の平城宮式系軒平瓦には退化型式がいくつか認められ、時間的な幅があることが推定される。

まず、分布の西端は高原遺跡である（図173）。かつては津高南廃寺・才ノ木廃寺などといわれていた遺跡である。軒丸瓦は背後の付属瓦窯からも出土している。当遺跡は古代の山陽道に面していることから、津高郡内の駅家もしくは郡衙に想定されている。三野郡と津高郡の関係については、吉田晶氏により『津高郷売券』(774～777年)の中に津高郡の少領として三野臣が署名していることや、津高郡内に「津高」を氏名にする氏族を検出できないことから、津高郡域は三野国造の地位にあった三野

氏の領域であったとされる(11)。後期古墳の分布をみても、旧津高郡域には多数の古墳が認められるものの、旭川西岸平野の三野郡域にはほとんど認められないといった傾向がある。旧津高郡域の平野部を大規模に調査した成果(12)でも、それ程安定した平野であったとはいえず、むしろ旭川西岸平野にある津島遺跡(13)や津島江道遺跡(14)では後期の大規模な集落が確認されている。また、旧津高郡域では後期古墳の他に大規模な製錬遺跡(15)が確認されており、周囲の丘陵部にも鉄滓が散布していることから、同様の遺跡が多数存在していることが予想される。一方、津島江道遺跡では同期の鍛冶遺構や関連遺物が多数出土している(16)。当地域の平野部における製鉄遺跡については、近年の発掘調査成果によりかなり複雑な様相を呈していることが指摘されているが(17)、旧津高郡域と旭川西岸平野部との鉄生産に関する関係は極めて大雑把に推測すると、前者で製錬作業、後者で製品への加工をおこなうといった、いわば地域的な分業が想定される。しかし、それは別々の集団間による分業ではなく、あくまで地形的特質からであって、そのため墓域は旧津高郡域に集中していると考えられる。つまり、旧津高郡域と旭川西岸平野部の６世紀後半における一体性は、考古学的な視点からも肯定される可能性が高いのである。

そうすると富原遺跡の位置は備前国の有力豪族の領域の中央に打ち込まれた楔であり、分割のための役割を担った官衙であったことが想定される。富原遺跡の平城宮式系瓦の分布は、備前国中枢地支配のための重要な位置に相当するのである。

分布の東端である備前国分寺(18)と馬屋遺跡(19)も、富原遺跡と同様に理解される位置にある。ただし、国分寺は鎮護国家の思想を備えた国家仏教を象徴するもので、いわば地方支配の為のイデオロギー的な拠点であり、平城宮式系瓦の分布は当然であろう。馬屋遺跡は字名を冠した遺跡名が示すとおり、赤坂郡内にあった高月駅に推定されている。赤坂郡と上道郡についても、本来は国造の位置にあった上道氏の領域であったと指摘されている。そして、馬屋遺跡の位置も両郡の境付近に位置しているのである。おそらく馬屋遺跡も富原遺跡と同様に、備前国の有力豪族の領域を分割するための官衙が存在する可能性が高い。したがって、馬屋遺跡における平城宮式系瓦の分布も備前国中枢地支配のための重要な位置にあるといえる。

図173－６は網ノ浜廃寺である。旭川河口に位置し、東西方向の瀬戸内海航路と、旭川を用いた南北方向の流通路とが結節する地点に相当する。現在は丘陵部上にあり丘陵裾部は陸地化しているが、それは近世以降の景観であり、当時は海岸、もしくは入江であった。また、丘陵についても広い平坦地が存在するのでもなく、この寺跡のバックグラウンドについては、周辺の景観を見る限り通常の氏寺の占地ではない。また、奈良時代末から平安時代初頭の軒丸・軒平瓦も出土しており、これは備中国の楯原廃寺(20)と全く同文であり、焼成も胎土も極めて似ている。このうち軒丸瓦は備中国の黒土窯(21)で焼成されており、備中国からの搬入品と考えられる。国単位を越えた交易によって瓦が搬入されることは、国府に関係する寺であることを示唆しており、平城宮式系瓦が分布することも同様であろう。そうすると、東西・南北方向の流通の結節点に位置することから、備前国の国府津に関係する遺跡である可能性が最も高いと思われる。

備前国の国府津については、図173－７の百間川米田遺跡から東西方向に方位をそろえた奈良時代の総柱建物が３棟検出されており(22)、さらに別の調査区から「市」と墨書した土器や盛り土をおこなった道路遺構が検出されている(23)ことから、国府津に比定する考え(24)がある。百間川米田遺跡は、旭川の分流が備前国府の推定地として有力な国府市場の北側をかすめて内海へ注ぐ地点であり、『大

安寺流記資材帳』にある「岩間江」に想定される場所でもある。国府の経済的機能を担うのは、国府と結ばれた国府市・国府津とされる。国府市とは国府や国衙役人のために設定された政治的市で、国府津は中央への貢納物を運送する拠点とされる(25)。両者は同じ地点に存在する場合もあれば、別の地点にある場合もあり、備前国の場合は後者であったとすると、百間川米田遺跡は墨書土器の出土から国府市、網ノ浜廃寺が国府津であったことが想定される。

ただし網ノ浜廃寺については周辺に平坦地はなく、国府津に必要な倉庫群などは想定できない。時期は下る文献であるが、長徳四年（998）に網ノ浜廃寺の対岸にある鹿田庄の船で、秋篠寺の美作国における年貢米を運んでいることが記されている(26)。これは、まさに旭川河口が貢納物を運送する拠点としての機能を有していたことを示している。鹿田庄の想定される旭川河口部の西岸付近は弥生時代からの集落遺跡で、鹿田庄の中心地とされる弥生時代中期末以来の集落遺跡である鹿田遺跡や、弥生時代後期の大集落と推定される天瀬遺跡がある。これら河口部の集落が母集団となって、網ノ浜廃寺背後の丘陵上に古墳時代前期の前方後円墳を築造しているとする考えもある(27)。また、旭川河口部東岸には奈良県氷室神社『大宮家文書』の中の「備前国上道郡荒野荘領地図」（正安二年（1300））に描かれた「荒野」がある。これは、旭川河口東岸に広がる新開地である「荒野」を開発して荘領とするために作成された「荘領図」で、開発主体者は鹿田庄の下司である村主幸氏の子である幸重である。これも旭川を挟んで対岸の領有をおこなっていることを示しており、旭川河口部の両岸は、古墳時代以来、一体の地域として考えられていたことも示している。つまり、備前国の国府津は旭川河口にあり、国府津の機能をおこなう官衙は西岸の微高地上に、それに付属する寺院が東岸丘陵部上の網ノ浜廃寺という理解も可能と思われるのである。そして長徳四年の史料は、平安時代の中頃には国府津の機能が鹿田庄に取り込まれてきていることを示唆している。

図173－２・４・５は賞田廃寺(28)、幡多廃寺(29)、ハガ遺跡であるが、成光廃寺出土の軒丸瓦(30)は、賞田廃寺にも使用されたもので、平城宮六一五一型式を模したものであり、これも平城宮式系軒瓦に含めると４地点ということになる。最も密度が高く、旭川両岸地域における平城宮式系軒瓦の分布の中心であるといえる。備前国の中では、平城宮式系軒瓦の分布は旭川両岸平野部周辺が最も分布が多いことから、備前国全体における平城宮式系軒瓦の中心が旭川東岸平野北半であるといえる。ここはまさに備前国府推定地であり、周辺の平城宮式系軒瓦も、国府に関係する官衙や寺院、備前国を押さえるための重要な官衙の存在すると推測される地点に分布していることからも、その分布の中心は、備前国の中心、すなわち国府の存在を示していると考えられる。

平城宮式系軒瓦に先行して、中央から地方への影響をうかがえる広域分布型式の瓦当文として、川原寺式系軒瓦がある。この瓦当文は壬申の乱（672年）における論功行賞として、地方の豪族へ普及したという説がある(31)。吉備（備前・備中・美作・備後を一応の範囲とする）においてその分布をみると、備前国の東端と備中国の西端に偏る傾向がある。吉備中枢地には分布していないことから、『日本書紀』において、吉備国守当摩公広嶋が近江方の使者に斬られた記事のその後の解釈として、吉備中枢地は近江方に取り込まれ、そのため天武朝では冷遇されたという考えも成り立つ。ただ川原寺式瓦当文の時期については、天智朝の時期という考え(32)と、天武朝の時期という考え(33)があり、それによっては、その分布の歴史的意味の解釈について大きな変更が必要となってくる。しかし、ここでは中央から地方への影響で、平城宮式系軒瓦に先行する軒瓦という極めて大雑把なとらえ方で、備前国南部における川原寺式系軒瓦の分布をみてみたい（図174）。

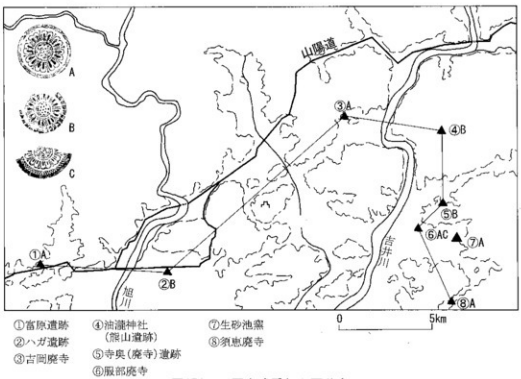


図174　川原寺式系軒丸瓦分布

川原寺式系軒瓦は、複弁蓮華文を特徴とするものであるが、外区外縁や外区内縁にいくつかのバリエーションが存在する。また、分布にしても、最近新たに見出された資料から、備前国の東端や備中国の西端に分布が偏るという見方、特に備前国については変更する必要が生じた。まず川原寺式系軒瓦のうち、外縁が素縁のものをA類、外縁に面違い輻線文を施すものをB類、内区外縁に施文をおこなうものをC類とする。A類は西から、富原遺跡(34)、吉岡廃寺(35)、服部廃寺(36)、生砂池窯(37)、須恵廃寺(38)で、B類はハガ遺跡、熊山遺跡（油瀧神社）(39)、寺奥（廃寺）遺跡(40)で、C類は服部廃寺(41)、である。これらの分布をみてみると、各類がまとまった分布域を形成するのではなく、むしろモザイク的な分布を示す。このことは、地域的な独自性というよりも、汎地域的な原理で分布していることを示しているように思われる。また、長船町の生砂池窯は瓦陶兼業窯であるが、A類の軒丸瓦が採集されており、川原寺式系軒瓦が在地で生産されていることを示している。生砂池窯産の軒瓦は服部廃寺に供給されており、それ以外にどこまで分布をしているのかをあらゆる角度から追跡しなければならないが、富原遺跡の軒丸瓦などはよく似ている。ともあれ、川原寺式系軒瓦の段階でも消費地だけではなく、在地の生産地も掌握しているといえる。一方分布の様相は、備前国を東西と南北に縦走・横断するようであり、平城宮式系軒瓦が、国府を中心として、面的な分布をするのとは対称的である。

美作国は、和銅六年（713）に備前国の六郡を割いて立国された。吉備四国のうち最も遅い立国について、狩野久氏は官道の建設整備が遅れたことに起因すると指摘する(42)。この指摘を極めてシンプルに理解すると、律令国家における地方支配の段階として、官道の整備→国の立国といった２段階が想定される。これを川原寺式系軒瓦と平城宮式系軒瓦の分布の特徴からみると、備前国において、まず、川原寺式系軒瓦の線的な分布があり、その後、平城宮式系軒瓦の面的分布へと変化するのではなかろうか。これは狩野氏の指摘した、律令国家における地域支配の段階を模式的に示している可能

性が高いように思われる。

（3）備前国府系軒瓦の動向

山陽道沿いに関する国府系軒瓦の研究については、今里幾次氏により「播磨国府系古瓦」と設定された[43]ことが最初で、その後、高橋美久二氏により山陽道諸国の国府系軒瓦の集成と整理がおこなわれた[44]。備前国については、より類例が増加しており、もう少し細かな動向を追跡することが可能と考え、若干検討してみることにする。

平城宮所用の瓦をかなり写実的で正確に模したと考えられる平城宮式系瓦は、備前国においては、南部に集中する。それらは寺院と官衙で、寺院については国分僧寺、尼寺のような官寺から氏寺まであるが、氏寺については定額寺として統制をはかった結果という考え[45]もある。先に検討したように、平城宮式系軒瓦が備前国支配のための要所に分布することからも、その分布には施策的性格が強く、氏寺への分布も同じと考えられる。ここでは備前国南部における平城宮式系軒瓦の分布に時間的

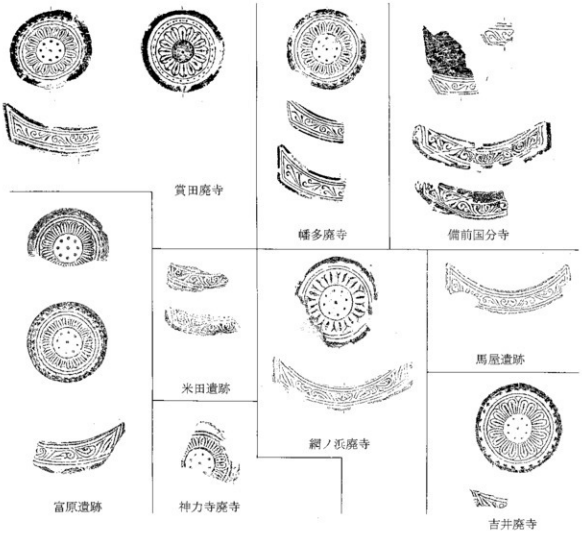


図175　備前国中枢地出土平城宮式系軒瓦

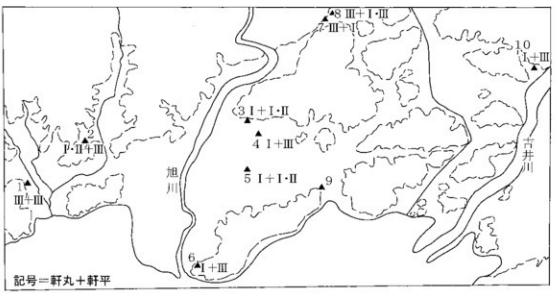


図176　備前国中枢の備前国府系軒瓦の分布

な差があることを指摘し、その差の意味を若干検討してみたい。

まず、分類であるが、軒丸瓦については同種の瓦を検討した中野雅美氏の分類[44]にしたがう。中野氏は吉備地域における平城宮式系軒丸瓦を第Ⅰ～Ⅲ類の３類型に分け、第Ⅰ類は平城宮六二二五型式をかなり忠実に模倣したもの、第Ⅱ類は第Ⅰ類よりも文様等が若干退化傾向にあるもの、第Ⅲ類はさらに文様が退化し、平易になり、大きさも小ぶりになっているものとした。それらは文様の退化的要素から第Ⅰ→第Ⅱ→第Ⅲ類の順に時間的なズレがあるとした。備前国では第Ⅲ類は認められないが、第Ⅰ類と第Ⅱ類は認められる。ここでは、軒丸瓦の第Ⅰ類と第Ⅱ類は中野氏の第Ⅰ類と第Ⅱ類と同じもの、そして、平城宮式系軒瓦とは異なる型式の軒丸瓦を第Ⅲ類とする。軒平瓦は平城宮六六六三型式の陽刻のものを第Ⅰ類、平城宮六六六三型式以外の陽刻のものを第Ⅱ類、平城宮六六六三型式の陰刻のものを第Ⅲ類とする。第Ⅲ類については、明らかに陽刻の第Ⅰ類の２次的な模倣であることや、備前国分僧寺や、百間川米田遺跡出土例のように、両端の単位を省略した退化型式のものが含まれることから、陽刻と比べ後出的で継続的といえる。また、第Ⅰ類については、より忠実な模倣であるものと、若干文様が崩れてきて一部に陰刻と思われるような表現が認められるものがあり、古相と新相に分けられるが繁雑になるため、ここでは同一に扱う。

各地点の平城宮式系軒瓦を以上の分類にしたがって軒丸瓦＋軒平瓦として表現したのが図176である。それによると、軒丸瓦Ⅰ類は軒平瓦Ⅰ類、軒平瓦Ⅱ類、軒平瓦Ⅲ類とセットになる場合がある。軒丸瓦Ⅱ類は軒平瓦Ⅲ類とセットになる。軒丸瓦Ⅲ類は軒平瓦Ⅲ類と軒平瓦Ⅱ類がセットになる場合がある。このことから、軒丸瓦Ⅰ類と軒平瓦Ⅰ類・Ⅱ類がセットになる段階（第１段階）と、軒丸瓦Ⅰ類と軒平瓦Ⅲ類がセットとなる段階（第２段階）、軒丸瓦Ⅰ類・Ⅱ類と軒平瓦Ⅲ類がセットになる段階（第３段階）が想定される。第１段階は賞田廃寺と幡多廃寺で、全て氏寺である。第２段階はハガ遺跡、網ノ浜廃寺、吉井廃寺で、国府直属の官衙関連遺跡と備中国中枢地東端の氏寺である。第３

段階は富原遺跡と神力寺廃寺で、官衙関連遺跡と備前国中枢地西端の氏寺である。備前国分僧寺は軒平瓦Ⅰ類もあることから、第１段階まで初源を求め得る可能性があるが、軒平瓦Ⅲ類もあることからその性格上いくつかの段階にまたがっているといえよう。

いずれにせよ、第１段階は氏寺への分布、それはおそらく中野氏[47]や、高橋氏[48]が指摘するように、郡司層の律令国家への取り込みを示しているといえる。第２段階と第３段階は、第３段階に軒丸瓦Ⅰ類が存在することからも、両段階には時間的な差が少なく、漸移的と理解される。第２段階と第３段階は国府関連官衙、もしくは官衙が中心であり、氏寺掌握後に国府関連の官衙を整備していった状況がうかがえる。そして、備前国中枢地の外縁部のうち、東端の郡司層の取り込みもおこなわれたと考えられる。第３段階にも神力寺廃寺があり、これは備前では最も備中寄りの氏寺である。第３段階には、郡衙関連の官衙の整備とともに、備前国中枢地外縁部西端の郡司層の取り込みがおこなわれたことを示している。

以上のように、平城宮所用瓦を模した国府系軒瓦は、備前国においていくつかの段階を設定することが可能で、その段階は地方支配をおこなうための施策の変遷過程を示している可能性があるといえる。各段階の具体的な年代は、第１段階がその模した瓦の関係から８世紀中葉[49]、第２段階から第３段階までが８世紀中葉から末のなかにおさまるという大枠のなかでしか示しえない。しかし、国府が８世紀前葉においても定まった施設をもたず、国司の職務が国内の郡家を巡回することにより遂行され、８世紀中葉に国衙施設が全国的に成立していくと理解[50]されていることと、第２・第３段階の備前国府系軒瓦の分布は合致する可能性が高いように思われる。

（４）備前国府の位置とその構造

平城宮所用瓦を模した軒瓦は、備前国支配のための要所に分布することや、細かな時期差も施策の段階を示していると考えられることから、備前国府が主体的に介在した国府系瓦と考えられた。その分布の中心は旭川東岸平野北半で、以前より国府が推定されていた地域である。また、平安時代に入る軒瓦についても、ハガ遺跡で出土した軒瓦の大半は、備前国分寺や服部廃寺などの国府関係、もしくは国府との関係が推測される寺院と共通しており、さらにその一部は平安宮まで搬入されている[51]。これらの瓦も平城宮式系軒瓦以降の備前国府系軒瓦と考えられる。ハガ遺跡の存在から、備前国府は一貫して旭川東岸平野に存在したと考えられる。

ではなぜ『和名類聚抄』に於いて、旭川西岸である三野郡に国府があると記載されたのかが問題となる。誤記として片付けられなくもないが、上道郡に国府が所在するという大東記念文庫本の『和名類聚抄』でも併記して三野郡に府があるとされていることからも、それは単なる誤記ではなく、三野郡に国府に類する施設の存在を示唆しているように思える。この点を検討してみたい。

三野郡の南端、旭川河口に存在した鹿田庄は殿下渡領で、平安時代の最高権力者である藤原氏の氏長者が代々に伝領した重要な荘園である。その設定時期や設定背景などは明らかでないが、平安時代の前半期には立庄されていたと考えられている。この荘園に関して有名なのは、寛和二年（986）に備前国司によって焼き討ちされたいわゆる「鹿田庄事件」である。この事件の直接的な契機などは不明であるが、鹿田庄が備前国府とかなり深刻な対立関係にあったことを示している。荘園と国府は基本的に相反する関係にあるが、平安時代の前半期に焼き討ちにまで発展するケースは珍しく、その対立が極めて先鋭化していたことを物語っている。先に触れたように鹿田庄が貢進物の運搬に関わって

いることから、旭川河口に国府津の存在を推測した。しかし、一方で国府津の機能を鹿田庄がおこなっているとも考えられる。国府津の機能は貢進物に関するため、国府経済のかなりの範囲を占めている。また平安時代に入ると山陽道沿いの国司の任国への赴任も海路でおこなうようになることから[147]、そのぶん海上交通路の重要性は格段に増し、津の重要性も上昇した。おそらく、そういったことが鹿田庄立庄の目的と合致したのであろう。そのため、鹿田庄は国府津と競合関係となり、その対立は激しいものになったと考えられる。

一方、国府が流通拠点へ移転した例もある。山城国府の例である[153]。山城国府は当初長岡京の南のいわゆる内陸部に位置していたが、淀川沿いの河陽離宮に移転した。河陽離宮は貞観三年（862）に山崎駅家を行宮としたもので、離宮になったとはいえ駅家の機能は併在していたと考えられている。国府移転の名目は旧国府の老朽化などであるが、淀川沿いにある流通拠点を直接掌握することを目的としたことは明らかである。対岸に殿下渡領である楠葉牧が存在することは象徴的である。また、歴史地理学的見地からであるが、安芸国府も流通拠点であった安芸駅家に移転したと指摘されている[154]。

以上のように国府そのものが流通拠点へ移転する例があることからも、流通拠点である国府津が国府の中でもかなり重要な機能を具備していたことは間違いない。おそらく、実質は旭川河口西岸、三野郡城に存在した備前国府津も同様で、ときに国府の機能も代行していたのではなかろうか。特に『和名類聚抄』の編纂された10世紀は、瀬戸内海で海賊が猛威をふるっており、これは海上交通が活発化したことの反作用でもあるといえる。国府津の存在は、まさに国府そのものにも匹敵する存在であったこともあるのではなかろうか。それが三野郡に国府が所在する、あるいは府があると記載された背景であったと推測される。

ただ備前国府に関しては、国府津のそういった性格だけで片付けられない点もある。それは津高北廃寺から出土する軒瓦の分布である。この軒瓦の分布は旭川西岸にまで広がっており、しかも退化形式が認められる点である。津高北廃寺の位置する津高郡は、本来旭川西岸の有力豪族である三野氏の領域で、津高北廃寺も三野氏の氏寺と考えられる。数種類の軒瓦が知られており、創建瓦は藤原宮式系であるが、その後は独特の軒瓦を使用する（図177）[155]。そのうち平安時代に属すると考えられる軒瓦が旭川西岸の北方薮ノ内遺跡[86]、南方（国体開発）遺跡[57]、南方釜田遺跡[88]の３ヶ所、旭川東

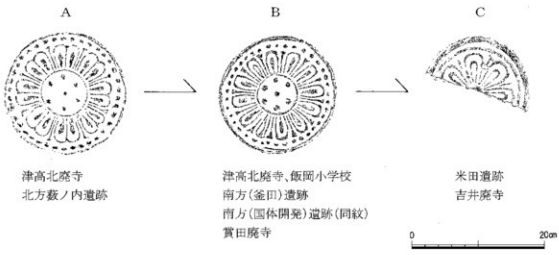


図177　津高北廃寺系瓦

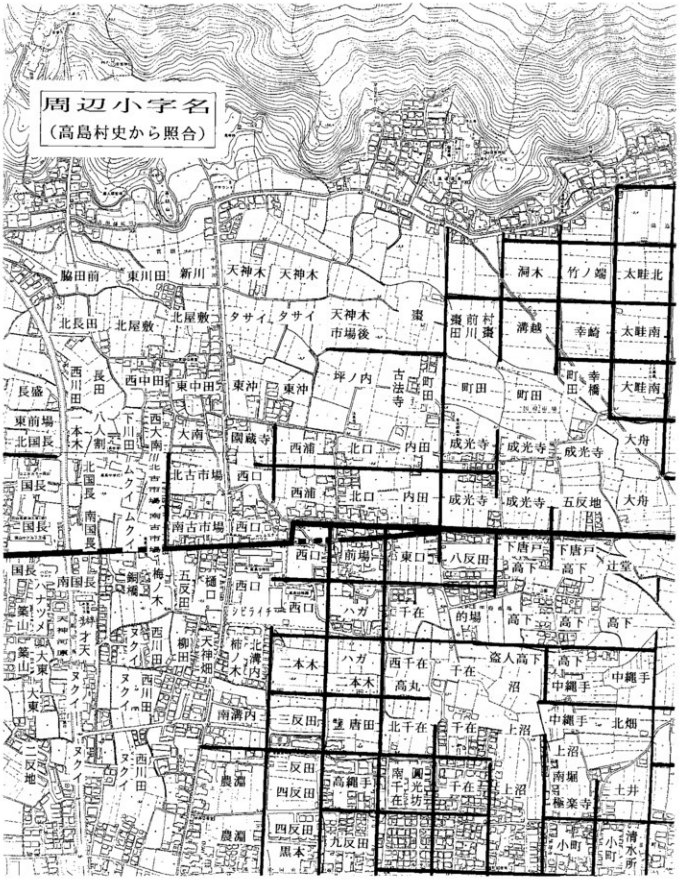


図178　条里地割及び小字名分布

岸では賞田廃寺[59]、旭川上流部では飯岡小学校（月の輪古墳麓の水田より採集）[60]、より退化したものが百間川米田遺跡[61]、吉井廃寺[62]で出土している。津高北廃寺系軒瓦が旭川両岸平野に広く分布することは、その影響が本来の三野氏の領域だけでなく、備前中枢地を覆っていたことを示唆しているのではなかろうか。三野郡域にあった国府津の重要性は、三野郡城の有力豪族であった三野氏の動向とも関係があった可能性があるように思われる。

さて、国府が旭川東岸平野にあったと考えたが、それでは現在県指定史跡である国長官でよいかということになるが、それは高橋護氏の指摘[63]や、国府市場周辺にある大きな微高地のうち、最も旭川に近く、洪水の被害を受けやすい微高地に存在するのは適切でないといった微地形の検討、国庁宮周辺からは瓦などの国府の存在を示す遺物が見当たらないなどの点から否定的であると考える。ハガ遺跡の存在する周辺は微高地も安定しており、かなり有力な候補である。そこで地割と小字名などを整理し、国府の位置を追求してみたい。国府のイメージはかつては方八町、あるいは方六町などの方格地割を伴った都城の縮小版ということであったが、最近の国府に関する発掘調査の結果、それは否定されてきている。国府域は中心となる正庁があり、周辺に国府関係の官衙が分布しているということになる。備前国府も同様と考えられ、ここでは国府中枢である正庁の位置を考えたい。

国府市場周辺の地割は条里地割と非条里地割が分布する（図178）。条里地割はこの地点を東西に横断する古代山陽道に規定された正方位地割である。ただし、1/2500都市計画図で山陽道を追跡すると、途中で南へ10°角度を変えて、その後直線で旭川の渡河点へ向かっている。直線的であることから、角度を変えたのも古代の時期と推測される。角度を変えずにそのまま西へ山陽道を延長すると、そこは旭川が緩やかであるがカーブする地点にあたる。そのような地点は最も洪水などの被害の受けやすい所でもある。おそらく、そのため渡河点を南へずらしたことの結果が山陽道の角度が曲がったことなのであろう。山陽道全体の角度を変えなかったことについては、条里地割が存在していたためとも考えられるが、条里地割が広範囲に分布するようになるのはかなり時期が降ることが確認されており[64]、その可能性は少ない。現在条里地割が分布する中井・南三反田遺跡の発掘調査でも、中世の水

図179　成光寺付近の土壇の範囲（スクリーントーン部分）

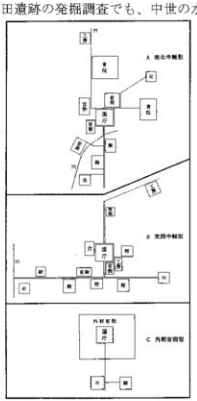


図180　国府域パターンの模式図

田層は現在の条里地割とは異なる方向の溝に規定されていた(68)。

そうすると山陽道の角度が変わる地点に、角度を変える起点となるものが存在したという可能性がでてくる。この点をさらに検討するために、周辺の小字名の分布を見てみたい。小字名については最近の調査成果もあるが(69)、国府市場域に関しては少なからず問題があり、『高島村史』の成果(17)を現況の地割にあてはめてみたい。地元の方への聞き取りをおこなったが、若干誤差があるものの、大枠では対応しているようである。　図178を見ると、山陽道の角度を変える地点は「成光寺」となっており、周辺には「幸橋」（こうばし）・「幸崎」（こうざき）・「高下」（こうげ）の小字名が分布する。美作国府の小字は「幸畑」であり、国府はこうに転訛しやすい。そうすると、幸橋・幸崎・高下も国府の端、国府の崎、国府の下の転訛とも推定される。しかも、これらの小字名は「成光寺」の周辺にあり、「成光寺」の端や先の位置にあるともいえる。高下は郡衙に関する地名でもあるが、「成光寺」の山陽道を挟んで南に位置するのは、まさに下の位置であるともいえる。さらに「成光寺」は成光廃寺といわれ、平城宮式系軒丸瓦が採集されている(68)。成光廃寺は現在、基壇状の高まりがあるようにも見えるが、その高まりを1/2500の地形図から検討すると（図179）、基壇というより自然地形のようである。また、軒丸瓦が採集されているものの、他に瓦は採集されておらず、現況では軒瓦はもとより平瓦もほとんど散布していない。成光寺は中世においては存在した寺院で、吉井川河口にある西大寺の関係文書に記載されている(69)。しかし、現況では寺院の基壇や瓦の散布もほとんど見られず、古代寺院の存在は確認されない。確認されないことを、古代寺院でないことの根拠にするのはあまり適切ではないが、国府関連の地名が周囲にあり、国府系瓦と考えられる平城宮式系軒瓦が採集されていることから、国府の中枢である正庁の可能性を考えたい。そうすると、旭川の渡河点の移動に伴う山陽道の変更は、正庁を起点に行われたという解釈となる。

金田章裕氏によると、国府域は３つのパターンに整理されている（図180）(70)。国府市場の西側にある山陽道に南接する南古市場遺跡では、方形掘り方の柱穴をもつ建物や、越州窯産青磁碗を含む食膳具が多量に出土しており、国府に関連する遺跡と考えられる(71)。国庁を中心に、東西方向に横断する山陽道沿いに関連官衙が分布していることが推測される。そうすると、備前国府は金田氏の分類の東西中軸型の可能性が高いように思われる。そして、ハガ遺跡も山陽に沿って分布する国府に付属する官衙の１つであるといえる。さらにハガ遺跡からは寺院に関する遺物が多く出土しており、寺院の性格が濃い官衙といえる。

注

（1）伊藤　晃「備前」『新修国分寺の研究　第４巻』吉川弘文館　1991年

（2）後神三千代「岡山平野における古代景観の復原」『立命館文学』第二四六号　1965年

（3）注１

（4）木下　良「古辞書類に見る国府所在郡について」『国立歴史民俗歴史博物館研究報告』第10集　1986年

（5）高橋　護「古地形から見た備前国府」『岡山県埋蔵文化財報告』1972年

（6）出宮徳尚「歴史的環境」『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会　1975年

（7）出宮徳尚「古代寺院址」『岡山県の考古学』吉川弘文館　1987年

（8）中野雅美「吉備における平城宮式瓦について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　1977年

（9）伊藤　晃「窪原北廃寺・窪原遺跡」『岡山県史　考古資料』1986年

乗岡　実「林信夫蒐集の考古資料Ⅰ瓦・陶磁器－備中高松城の遺物を中心に－」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1999（平成11）年度』2001年
(10) 玉井伊三郎『吉備古瓦図譜』第1輯　1929年
(11) 吉田　晶「吉備と律令体制の成立」『岡山県史』古代Ⅱ　1990年
(12) 伊藤　晃ほか「田益田中（国立病院）遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』140　1999年
柳瀬昭彦ほか「田益田中（国立病院）遺跡」『岡山県埋蔵文化山発掘調査報告』141　1999年
(13) 岡山県教育委員会『津島遺跡を掘る』2　2001年
(14) 草原孝典「津島江道（岡北中）遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査の概要1996（平成８）年度』　1998年
(15) 乗岡　実「岡山市域における最近の発掘調査」『古代吉備』第13集　1991年
(16) 注14
(17) 宇垣匡雅「調査の成果」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』139　1999年
(18) 注１
(19) 伊藤　晃「馬屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99　1995年
(20) 葛原克人「秦原廃寺」『総社市史』考古資料編　1987年
(21) 柳瀬昭彦「黒土窯址・寒田窯址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』31　1979年
(22) 井上　弘ほか「百間川当麻遺跡」２『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』52　1982年
(23) 物部茂樹ほか「百間川米田遺跡」４『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』164　2002年
(24) 河本　清「国府と官衙」『岡山県史』原始・古代Ⅰ　1991年
(25) 栄原永遠男「奈良時代の流通経済」『史林』第55巻　第４号　1972年
(26) 中野栄夫「備前国鹿田庄事件」『岡山県史』古代Ⅱ　1990年
(27) 松木武彦「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』　第６冊　1993年
(28) 出宮徳尚ほか『賞田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会　1971年
(29) 出宮徳尚ほか『醍多廃寺発掘調査報告』岡山市遺跡発掘調査団　1975年
(30) 厳津政右衛門「成光寺跡」『岡山市史』古代編　岡山市役所　1962年
(31) 高橋美久二「山城国葛野・乙訓両郡の古瓦の様相」『史想』15号　1970年
八賀　晋「地方寺院の成立と歴史的背景」『考古学研究』第77号　1973年
伊藤　晃「初期寺院と瓦」『吉備の考古学』福武書店　1987年
(32) 藤沢一夫「摂・河・泉出土古瓦の研究」『考古学評論』第３号　1941年
奈良国立文化財研究所『川原寺発掘調査報告』1960年
上原真人『日本の美術359－蓮華文－』至文堂　1996年
(33) 金子裕之「軒瓦製作技法に関する二、三の問題－川原寺の軒丸瓦を中心として－」『文化財論叢』同朋舎　1983年
畑中英二「穴太瓦窯の再検討－穴太廃寺の再建論によせて－」『古代文化』Vol.53　2001年
(34) 伊藤　晃「富原遺跡」『岡山県史』考古資料　1986年
(35) 柳瀬昭彦「吉岡廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』49　1982年
(36) 池田　浩ほか「服部廃寺」『長船町埋蔵文化財発掘調査報告』２　1997年
(37) 池田　浩「生砂（産上）池窯跡」『長船町史』資料編（上）考古古代中世　1998年

(38) 宇垣匡雅「須恵廃寺採集の瓦」『西谷遺跡』長船町教育委員会　1985年
(39) 守岡桂太「備前熊山南麓の瓦」『吉備考古』第八十六号　1953年
(40) 田代健二「備前市内採集の遺物について」『古代吉備』第10集　1988年
(41) 注36
(42) 狩野　久「古代国家の発展と吉備」『岡山県の歴史』山川出版社　2000年
(43) 今里幾次「播磨国分寺式瓦の研究－加古川市野口町古大内出土の古瓦－」『播磨郷土文化協会研究報告』第４冊　1960年
(44) 高橋美久二「山陽道古瓦の系譜」『新修国分寺の研究』第4巻山陰道と山陽道　吉川弘文館　1991年
(45) 菱田哲郎「考古学からみた古代社会の変容」『日本の時代史５　平安京』吉川弘文館　2002年
(46) 中野雅美「吉備における平城宮式瓦について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　1977年
(47) 注46
(48) 注44
(49) 毛利光俊彦「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」『平城宮発掘調査報告ＸⅢ』1991年
(50) 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房　1994年
(51) 近藤喬一編『平安京古瓦図録』平安博物館　1977年
(52) 田名網宏『古代の交通』吉川弘文館　1969年
(53) 木下　良『国府』教育社　1988年
(54) 注53
(55) 伊藤　晃「富原北廃寺・富原遺跡」『岡山県史』考古資料　1986年
(56) 高田恭一郎「北方叡ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』149　2000年
(57) 岡山市教育委員会により発掘調査がおこなわれた。
(58) 乗岡　実「岡山市域における最近の調査成果」『古代吉備』第10集　1988年
９世紀前半の濠から出土
(59) 岡山市教育委員会『吉備の古代瓦』1980年
(60) 駒井正明「古代吉備における軒瓦の様相」『考古学研究』第37巻第３号　1990年
(61) 注23
(62) 注59
(63) 注５
(64) 草原孝典『足守庄関連（足守幼稚園）遺跡』岡山市教育委員会　1994年
(65) 桑田俊明「中井・南三反田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』92　1994年
(66) 岡山市立高島公民館『地図で見る高島再発見～地図を通して高島地区（旧上道郡高島村）の歴史を読む～』2001年
(67) 水藤千代造『高島村史』吉備高島聖蹟顕彰会　1937年
(68) 注30
(69) 注30
(70) 金田章裕「国府の形態と構造について」『国立歴史民族博物館研究報告』第63集　1995年
(71) 岡山市教育委員会により発掘調査がおこなわれた。

7　ハガ遺跡の性格

ハガ遺跡は方一町の外郭と東西幅1/3町の内郭構造をもち、方位も真北に合わせている。存続期間も長く、三彩陶器や羊形硯などの極めて出土例が稀な高級品も伴っている。また、備前国府の推定正庁地点（成光廃寺）に隣接することからも、備前国府に関係した官衙と考えられる。外郭と内郭の二重構造をもち、外郭には総柱建物や炉状遺構、坩堝などを廃棄した土壙もあることなどから、工房的な空間であったと考えられる。内郭にも総柱建物があるものの、瓦塔が出土しており、しかも多数出土した杯には全て灯明痕が認められる。また、瓦製の大きな鉢や「寺」と墨書した土器、時期が降る遺物であるが泥塔も出土している。瓦塔を集成し整理した成果によると、吉備の瓦塔は寺院に伴う場合が多い(1)。ハガ遺跡の南にある幡多廃寺の発掘調査でも、灯明痕のある杯が多く出土している(2)ように、灯明痕のある土器は法会などの仏教行事に用いられたものと考えられる。内郭から出土した遺物は、内郭が寺院的性格であったことを示している。また泥塔は平安時代後期と推測され、同期の軒瓦も出土していることから、その性格は平安時代の後期まで存続していたといえる。しかし回廊をめぐらしていたり、建物が全て瓦葺であるような、一般的な寺院の構造ではない。寺院的性格の空間であったといえる。

以上のことから、ハガ遺跡は工房を伴った寺院的性格の官衙であった可能性が高い。８世紀中葉になると、独特の軒瓦を葺いた７世紀後半に創建・整備された私寺へ、備前国府が介在したと考えられる平城宮所用瓦を模した軒瓦が使用されるようになる。これは単に軒瓦だけの問題ではなく、私寺が備前国府に管掌されるようになったことを示していると考えられる。律令国家における地方寺院の統制は、国司とともに僧官である国師がおこなっていたと指摘されている(3)。国師は国分寺が建立されると国分寺に、それ以前については国府域内の仏舎である国府寺にいたとする説(4)と、国府とは別の地点にいたという説(5)がある。ただし国府寺については確実に古代に属する資料の中には認められないことから、文献上からはその存在は否定的である(6)。

ハガ遺跡は国府に属する官衙であり、仏教的施設を中心として工房を具備している。国分寺建立以前から存在していることから、国府の仏教行事を国分寺に先行して行っていたところとも考えられる。工房などが伴っていることから、国府管掌下の私寺への維持にも使用されていたのであろう。

ハガ遺跡はまさに、国府寺の機能を有した遺跡であるといえる。しかしながら仏教施策の拠点である国分寺建立後も存続している。これについては国府と国分寺の距離の関係を示した木下良氏の図〔図181〕が参考となる(7)。大半が国府と国分寺は隣接する関係にあるが、備前国は例外的に５km以上離れており、郡域も異なっている。同様の例は、かつては備前国の一部であった美作国である。美作国府の北側にある太田茶屋遺跡(8)は、丘陵上の遺跡で

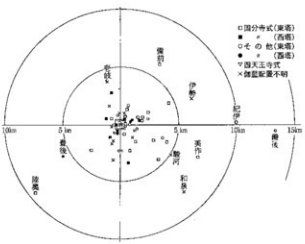


図181　国府からみた国分寺(僧寺)の位置
国府想定地と国分寺との距離(km)

あるため遺構が流出している部分があり、中世の遺構とも重複していることから厳密な遺構の構成を復元することは困難であるが、両脇に総柱建物を伴った正殿風の掘立柱建物がある(9)。美作国府所用瓦や瓦塔が出土していることから、ハガ遺跡と極めて似た施設であった可能性がある。国府と国分寺との間に距離があった場合、国府の付近に国府直属の仏舎が存在していたのではなかろうか。そして備前国府の場合、それが備前国の仏教政策をも実質的に管掌していた官衙であったことが推測される。美作国府の場合は、国分寺とそういった仏舎の両方を維持することができず、太田茶屋遺跡は奈良時代以降に継続しなかったと推測される。

いずれにせよ、ハガ遺跡は国府城内の構造を復元するための極めて良好な手掛かりであるとともに、備前国府中枢である正庁の位置を追求するための重要な基点になるといえる。

注

（1）亀田修一「吉備の瓦塔」『瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』古代吉備研究会　2002年

（2）出宮徳尚ほか『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会　1975年

（3）中井真孝『日本古代の仏教と民衆』評論社　1973年

（4）角田文衛「国分寺の設置」『国分寺の研究』考古学研究会　1938年
　木下　良「国府付属寺院について－角田博士の「国府寺」を承けて－」『考古学叢論』1983年

（5）難波俊成「古代地方僧官制度について」『南都仏教』第28号　1972年

（6）家永三郎『上代仏教思想史研究』1942年

（7）木下　良『国府』教育社　1988年

（8）岡本寛久ほか「太田茶屋遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』129　1998年

（9）注8
　妹尾周三「古代の仏堂と蔵－岡山県津山市で検出された大形建物の一解釈－」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』古代吉備研究会　2002年

Ⅱ．古代２（７世紀）

７世紀については柱穴が検出されたが、建物にまとまるものもなく出土した遺物の量も少ないことから、集落の縁辺に相当するのだと考えられる。ただし、竪穴住居が認められないことや、調査区の中央やや西よりを北西方向から南東方向に縦断する溝の方向に柱穴列の方向を合わせている傾向が看取される。

まず７世紀における竪穴住居の例については、県下では岡山市鹿田遺跡(1)、金光町上竹遺跡(2)、真備町和唐寺遺跡(3)などにある。しかし６世紀の集落遺跡のように、竪穴住居が集まって集落を形成しているといった景観ではなく、いずれも単独あるいは散発的に分布している。一方７世紀における集落例としては、倉敷市矢部南向遺跡(4)、岡山市百間川原尾島遺跡(5)、同赤田東遺跡(6)などがあり、いずれも掘立柱建物が主体で、しかも建物群は溝によって区画されている。区画する溝は直線的であり、建物の棟方向もそれに合わせている。百間川原尾島遺跡や赤田東遺跡では、そういった区画された、いわば屋敷地が複数隣接して検出されている。８世紀における集落の景観については、１～３棟

の側柱建物と１棟の総柱建物が1つの単位となった単位が、単独、あるいはいくつか集まって集落を形成している。７世紀においては、百間川原尾島遺跡や赤田東遺跡の様相を見る限り、７～８棟の側柱建物に２～３棟の総柱建物が1つの区画に認められることから、８世紀よりも多くの建物で1つの単位が構成されていたといえる。６世紀後半の集落については、岡山市津寺遺跡(7)や山陽町斎富遺跡(8)のような広域調査例をみると、極めて相互に切り合った竪穴住居が密集して検出されている。該期の集落の調査では竪穴住居が多数切り合って検出されることが多く、６世紀後半における当地の集落の一般的な様相といえる。しかしより微細にみると、とくに切り合う密度の高いブロックが抽出でき、津寺遺跡ではそれらを画する溝もある。この溝は７世紀の区画溝のように整然とはしてはいない。つまり、６世紀後半の集落も、竪穴住居が６～７棟まとまった単位によって構成されているのである。ただし切り合っているため、実際に１つの単位が竪穴住居何棟で構成されていたのかはわからない。しかし、同じ位置で多数の竪穴住居が切り合っていることは、その単位がかなり固定的であったことを示している。おそらく７世紀の集落は、６世紀後半の集落の固定的となっていた単位をさらに飛躍的に再構成したのではないかと推測される。そして８世紀の集落は、７世紀におこなわれた集落の再編の延長で、より細分化された単位として再々構成されたといえる。このように６世紀から８世紀における集落の変遷をとらえると、７世紀における集落の変化は画期的といえる。８世紀の集落が律令国家に把握されたものであったとすると、その原点は７世紀にあるということになる。つまり、県下における７世紀の集落の変化は、単なる地域性ということではなく、おそらく畿内中枢からの影響による可能性が高いように思われる。

『日本書紀』によると、７世紀はいわゆる蘇我氏主導で、吉備に屯倉が設定されている。該期における当地の集落の変化は、この時期の吉備における屯倉の設定が、単に直轄地を地方に設定する以上の歴史的意味を持っていたことを示唆しているように思われる。ハガ遺跡の７世紀の集落もその一端を示している。

注

（１）山本悦世(1)「鹿田遺跡」『岡山大学構内発掘調査報告』第3冊　1988年
（２）井上　弘(2)「上竹西の坊遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69　1988年
（３）小野塁二(3)「和唐寺遺跡」『真備町埋蔵文化財発掘調査報告』２　2001年
（４）江見正己(4)「矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94　1995年
（５）平井　勝(5)「百間川沢田遺跡」３『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84　1993年
（６）草原孝典「赤田東遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報』２　2001（平成3）年度　2003年
（７）高畑知功(6)「津寺遺跡」５『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127　1998年
（８）下澤公明(7)「斎富遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』

Ⅲ．中世

12世紀後半以降になると、古代遺構面の内郭部分を中心とした微高地高位部には規模の小さな柱穴が多数検出され、集落域として利用されている。一方低位部は水田化されており、高位部と低位部の

地形変換点には水路が掘削されている。水路の方向は、古代における官衙の方向性を踏襲しており、この方向は現況の水田地割にも反映されている。ただし中世の建物については、あまりこの方向を意識しているわけではなく、古代のような方向の規定が中世集落の建物にまで影響を及ぼしていたという可能性は少ない。また、そういった意味からも、中世の集落は一般的な集落であったと考えられる。

ところで、集落の南端と考えられる地点から土器焼成窯が一基検出された。遺構の残存状況が良好であったにもかかわらず、炉壁以外の遺物の出土が少なかったため詳細な時期を限定することは難しいが、最も時期が下る青磁片の出土から、15世紀前後の時期と考えられる。中世の土器焼成窯の発掘調査例は、県下で６例がある(1)。瀬戸町万富瓦窯遺跡(2)ではわずかな面積の発掘調査にも関わらず、中世の土器窯が複数検出されており、おそらく土器焼成窯群の様相になると推測される。ほかはいずれも１～２基の単独で、集落の一画、もしくは縁辺で築かれている。万富瓦窯遺跡については、その南に『一遍上人絵伝』にも描かれている中世の市である福岡市が存在していることと関係があると思われる。おそらく福岡市という一大消費地への供給のために、窯群が形成されたと推測されるのである。これは土器焼成窯だけでなく、備前長船として有名な刀剣作りの地が福岡市の北側に形成されていることも共通の理由によるものと考えられる。

中世の土器焼成窯のあり方としては、万富瓦窯跡のように群を形成するのは当地においては特異な様相で、１～２基が単独で集落の一画などに築かれるのが一般的な様相であったと考えられる。さらに、中世の鍋の胎土分析を県南部から出土した遺跡ごとに比較した成果(3)によると、同じ胎土の鍋が同一河川流域にまとまるのではなく、同一河川流域内で異なった胎土がモザイク的に分布する。このことと土器焼成窯の様相から、中世の土師質土器は集中した生産地を形成せず、土器工人が各地を移動しながら生産していた姿が推測された。しかもそれは、農間副業的な工人であることも予想された。ハガ遺跡で検出された土器焼成窯についても、集落の一画で１基単独で操業されており、しかもその集落が土師質土器生産を主体におこなっていたという様相でもないことから、工人が集落の一画を借りて土器の生産をおこなったと考えられる。ただ、窯壁に認められる板状工具の圧痕については、万富瓦窯跡から出土したものに同様の圧痕が認められる(4)。このことは農間副業だけでなく、瓦や備前焼などの焼成をおこなっている工人が、その生産活動の合い間に土器生産をもおこなっていたことを示している可能性が高い(5)。

また、ハガ遺跡の南にある古代寺院の轟多廃寺(6)では、中世において伽藍の一角に瓦窯が形成されている。笠岡市関戸廃寺(7)も古代寺院であるが、一角に古代末の土器焼成窯が築かれている。ハガ遺跡も中世以前は官衙である。官衙の敷地も、古代においては一般集落の形成を疎外しているという点では古代寺院と共通している。いわばそのような空間が、古代末から中世にかけて手工業生産の場として使用されるようになっていることは、３例もあることから中世においては一般的な様相であったように思われる。言い換えると、官衙や寺院であった敷地は、中世において一過性の性格が強い生産で、いわば在地に根ざしていない工人が生産をおこなえる場として承認されていた空間であったということではなかろうか。ハガ遺跡からは、遺構からの出土ではなかったが火葬骨の入った備前焼壺も出土している。おそらく付近に墓地が形成されていたのであろうが、そういった空間の在地の人々における土地利用の様相の一端も示唆しているといえる。

注

（1）草原孝典『三手向原遺跡』岡山市教育委員会　2001年

（2）岡本芳明「史跡万富東大寺瓦窯跡」『瀬戸町埋蔵文化財発掘調査報告』1　2003年

（3）白石　純「三手向原遺跡出土土師質鍋の胎土分析－岡山市南部山土の鏃を中心に－」『三手向原遺跡』岡山市教育委員会　2001年

（4）瀬戸町教育委員会の岡本芳明氏のご厚意により実見させていただいた。

（5）注2によると、東大寺窯に隣接して備前焼の窯が営まれたと指摘されている。もし、そうであるならば、備前焼工人が、東大寺瓦を焼成していたことの傍証になるとともに、備前焼工人が産地を移動して備前焼以外の焼き物生産をおこなっていたことの具体例にもなる。

（6）出宮徳尚ほか『鯖寺廃寺発掘調査報告』岡山市遺跡発掘調査団　1971年

（7）安藤康宏ほか「関戸廃寺」『笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告』3　1997年

Ⅳ．近世

ハガ遺跡における近世の遺構は、水田耕作に伴う素堀り溝のみであり、遺物もほとんど出土しなかった。集落地から離れた水田としての土地利用がなされていたといえる。E区東半の最も高度が高い部分からは全く遺構が検出されなかったため、水田として利用されたことに若干疑問があったが、E区西半の中世以来水田化された部分の地上げに微高地上の包含層をそのまま切り崩して用いていることから、近世における大規模な水田開発の際には水田化されていたといえる。

ハガ遺跡の位置する旭川東岸域は灌漑域面積が約2000haにもおよぶ祇園用水が幹線用水路になっている。現況の祇園用水は東岸になる河本の上流の旭川合同堰（管掛堰）で取水して、サイホンの原理で東岸に渡り、竜ノ口山の裾部をめぐる。そして、祇園大樋から新田用水と吉田（樋尻）用水に分水する。用水の形状は、旭川東岸のデルタ地形にそって扇形であり、全体としては地形に即している。この用水の開発は中世まで遡るといわれているが、元禄5年（1692）に岡山藩による沖新田の干拓事業に伴って大規模な整備がなされた。現況の水配りの状況から、おそらくハガ遺跡で検出された近世の大規模な水田開発の痕跡はこのことと連動しているものと考えられる。極めて少ない出土遺物であるが、地上げに用いた包含層の二次堆積土中から18世紀の陶磁器も出土している。祇園用水の整備に伴って新たな用水路が掘削されたと推測され、その一つがハガ遺跡の北側を東西の条里や古代以来の山陽道に沿って流れる円蔵寺川であったと考えられる。この川はハガ遺跡よりも海抜高が高い所を流れていることから、ハガ遺跡全域に給水することができる。ハガ遺跡における近世の大規模な水田開発の痕跡は、円蔵寺川の開削時期を示すと同時に、その開発が条里、もしくは古代以来の山陽道を基線にしていたことを示している。また、現在は条里制地割りの中にある中井南三反田遺跡(1)では、中世の溝が条里とは異なった方向であったことが確認されている。これらの事例は旭川東岸に広く分布する条里地割りが、かなり新しい時期に完成されたことを示唆しているものといえる。

注

（1）桑田俊明「中井・南三反田遺跡（備中国府推定地）」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』92　1994年

報告書抄録

ふりがな	はがいせき
書名	ハガ遺跡
副書名	備前国府関連遺跡の発掘調査報告
編著者名	草原孝典
編集・発行機関	岡山市教育委員会文化財課
所在地	〒700-8544　岡山市大供1-1-1　　tel 086-803-1000
発行年月日	西暦2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ハガ遺跡	岡山県岡山市 国府市場167-1他	33201		33° 56′ 00″	145° 62′ 00″	1999.01.05～1999.05.07 2000.06.26～2001.04.26	1631.0	市立高島小学校プール新築工事に伴う事前調査

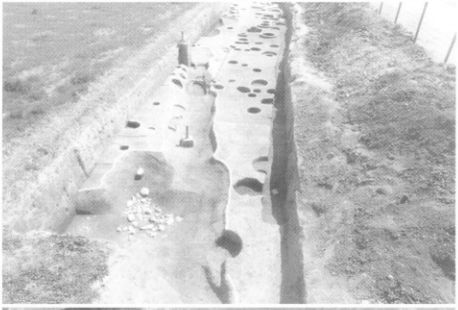
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ハガ遺跡	官衙 集落	飛鳥時代 奈良時代 平安時代	建物 土壙 溝	土師器 須恵器 陶磁器 陶硯	三彩陶器・羊形硯などの地方では稀な遺物が出土。

図　　版

遺跡周辺空撮（昭和48年）

図版 2

1．A～D区　空撮
（掘家純一氏撮影）



2．A区　古代遺構面

3．A区
P20遺物出土状況

2．A区
塚状遺構

2．A区　塚状遺構盛り
土断面

3．A区
P71断面

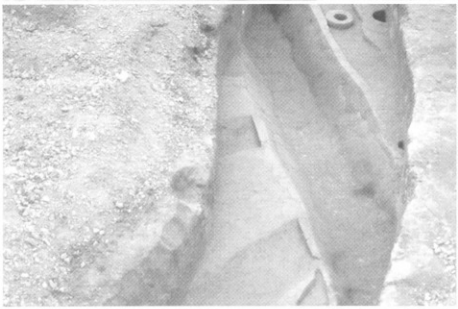
図版４

2．B区　拡張区
築地検出状況

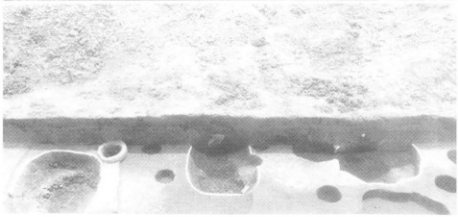
2．B区　築地上面軒
丸瓦出土状況

3．C－1区　拡張区1
下層遺構

2．C−1区拡張区2・
C−2区　外郭溝
掘り上がり



2．C区
溝15（外郭溝）



3．D区
建物1

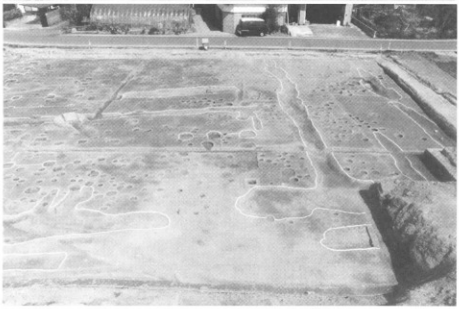
図版 6

1．A区
溝1

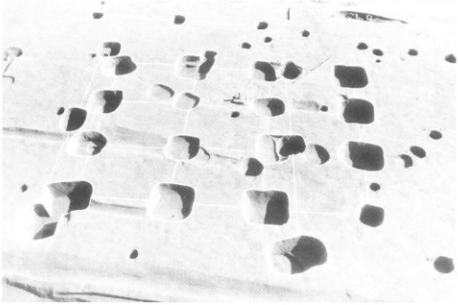
2．E区南側
断面

3．E区西側
古代1遺構面

1．E区中央
古代１遺構面

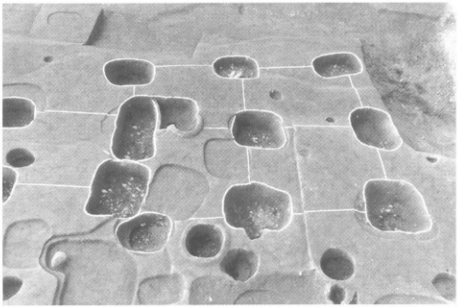


2．E区東側
古代１遺構面

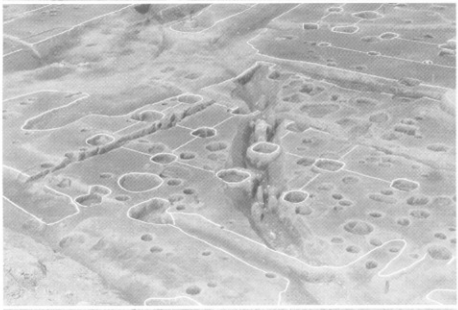


3．E区
建物２

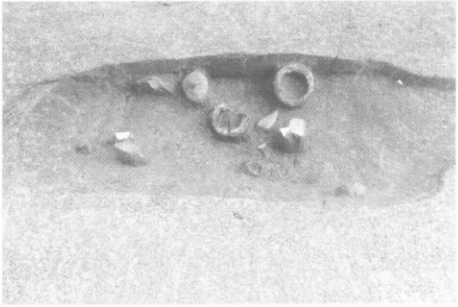
図版 8



2．E区
建物3

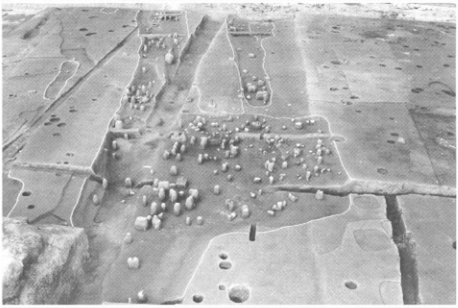


2．E区
建物4



3．E区
P265

1．E区　内郭溝西側
遺物出土状況

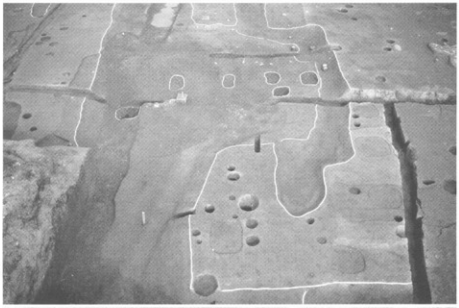


2．E区　内郭溝西側
遺物出土状況

3．E区　内郭溝西側
遺物出土状況(拡大)

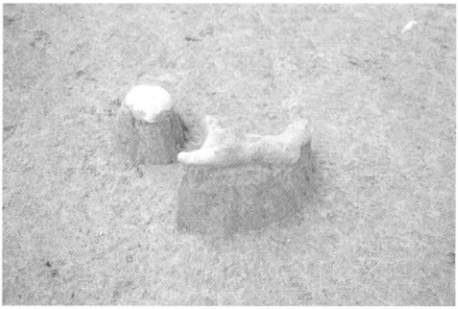
図版10

1．E区　内郭溝西側
遺物出土状況(拡大)

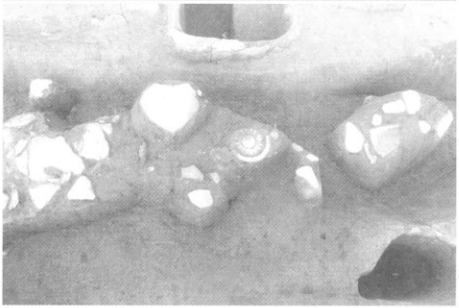


2．E区　内郭溝西側
掘り上がり

3．E区　内郭溝西側
コーナー付近



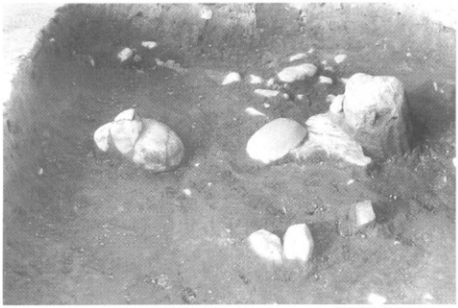
1．E区　内郭溝土馬
出土状況



2．E区　内郭溝(溝11)
軒丸瓦出土状況

3．E区
墓1

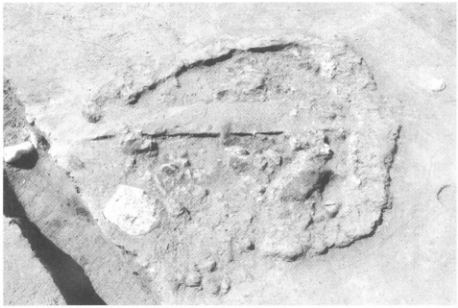
図版12



1．E区
墓１土器出土状況

2．E区西側
中世遺構面

3．E区東側
中世遺構面



1．E区　土器焼成窯
検出状況

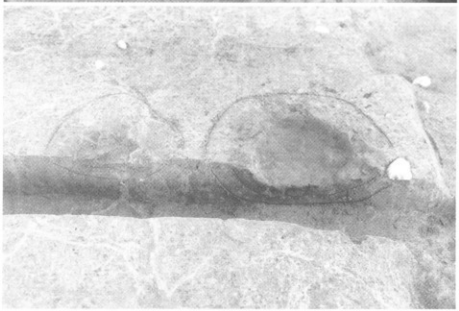
2．E区　土器焼成窯
埋土断面

3．E区
土器焼成窯

図版14

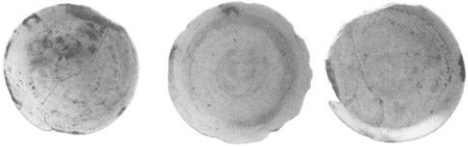
1．E区
土器焼成窯

2．E区　土器焼成窯
断ち割り

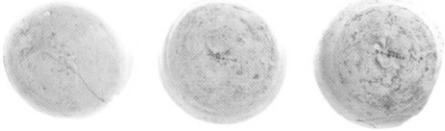


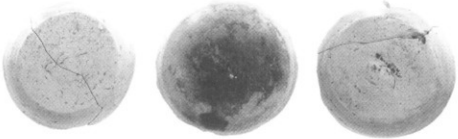
3．E区
炉1・2

I 期内郭溝

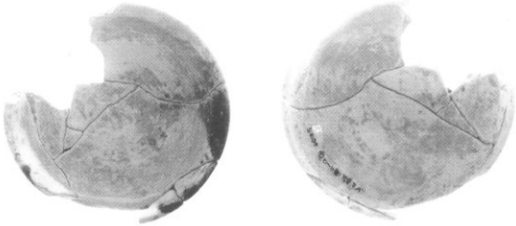


40. 42. 49.
50. 53. 54

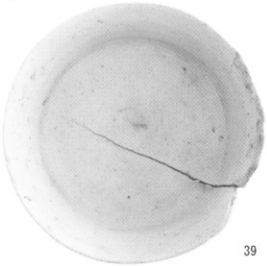




40. 42. 49.
50. 53. 54

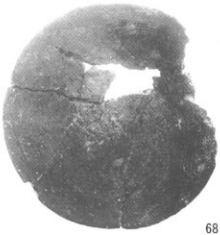


I 期内郭溝

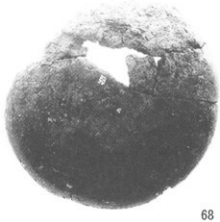


39

39



68



68

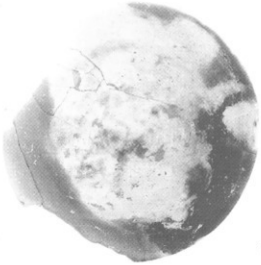
83

28

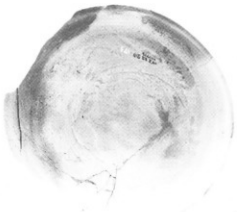
84

Ⅰ期・Ⅱ期内郭溝

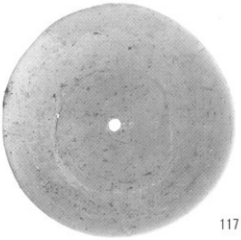
81



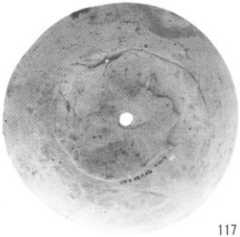
107



107



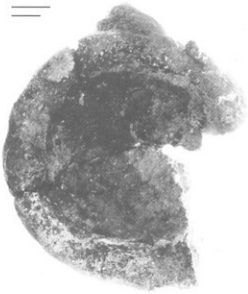
117



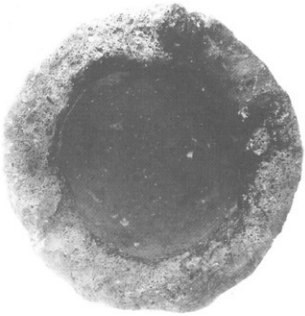
117

106

図版18



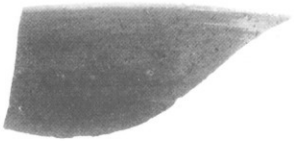
P265. 包含層



31

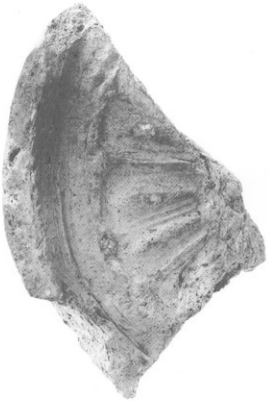
30

D11

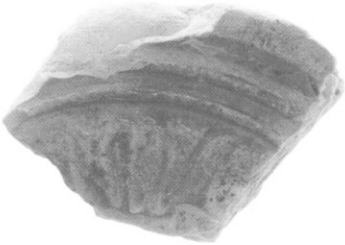


34

軒瓦



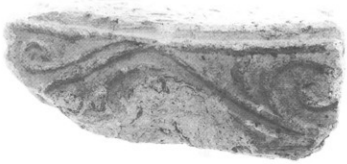
4類



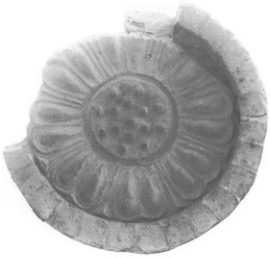
2類

2類

3類



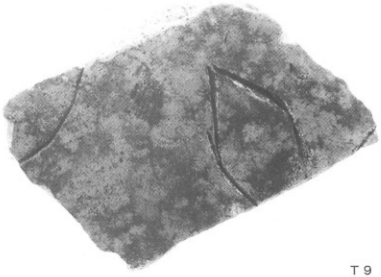
3類



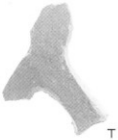
1類

図版20

瓦塔



T9



T6

T10

T12

T4

T2